



# **Oracle® Business Intelligence Disconnected Analytics 管理および構成ガイド**

リリース 10.1.3.2

2007 年 4 月

Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics 管理および構成ガイド, リリース 10.1.3.2

部品番号 : E05034-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics Administration and Configuration Guide, Version 10.1.3.2

原本部品番号 : B31772-01

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

# 目次

## 第 1 章： このリリースの新機能

## 第 2 章： Oracle BI Disconnected Analytics の概要

Oracle BI Disconnected Analytics について	10
Oracle BI Disconnected Analytics で頻繁に使用される用語	11
切断された環境とネットワーク環境との相違点	13
切断されたアプリケーション用の SQL スクリプト	13
切断されたアプリケーション用のソース・クエリー	13
Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager	14
Oracle BI Disconnected Analytics のアーキテクチャ（サーバーとラップトップ）	14
Oracle BI Disconnected Analytics の使用例	15

## 第 3 章： Oracle BI Disconnected Analytics の設定

Oracle BI Disconnected Analytics クライアントのインストール	18
instanceconfig.xml ファイルの更新	18
Oracle BI Disconnected Analytics による ODBC DSN 用認証の構成	19
切断されたクライアントに対する Sun ONE Web サーバーの構成	20
Windows シングル・サインオンで使用するための Oracle BI Disconnected Analytics の設定	20

## 第 4 章： Oracle BI Disconnected Analytics のアプリケーションの準備

手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握	22
手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト	24
SQL スクリプトの作成	24
SQL スクリプトを使用して切断されたテーブルと索引を作成する例	24
切断されたテーブルと索引を作成する SQL スクリプトのテスト	26
切断されたディレクトリへの SQL スクリプトの格納	26
手順 3: 切断されたリポジトリの作成と格納	26
データベース・タイプと接続プールの割当て	26
切断されたリポジトリのテストと格納	28
手順 4: ローカル Oracle BI Presentation Catalog の作成	29
手順 5: Oracle BI Disconnected Analytics 用のソース・クエリーの定義	30

手順 6: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルの作成 32

データセット定義の操作 33

複数のデータセットの定義 33

複数のテーブルからの結合テーブルの生成 37

アプリケーション構成ファイルの例 39

retail.xml 構成ファイルの構造 39

retail.xml 構成ファイルの要素と属性の説明 40

Oracle BI Server からのアプリケーションの削除 42

## 第 5 章: Oracle BI Disconnected Analytics へのアプリケーションのデプロイ

手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストールの作成とテスト 44

手順 2: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションのテスト 45

手順 3: アプリケーションのダウンロードのテスト 45

手順 4: 切断されたマシンの設定 46

ユーザーのマシンへの Oracle BI Disconnected Analytics のインストール 46

ユーザーのマシンへのアプリケーションのダウンロード 47

サイレント・モードで動作するためのユーザーのマシンの設定 47

## 第 6 章: Oracle BI Disconnected Analytics でのアプリケーションの同期化

同期について 50

同期の設定 50

手順 1: 同期の構成ファイルの変更 50

手順 2: Oracle BI Presentation Catalog からの更新アラートの無効化 52

手順 3: バックグラウンド同期の設定 (サイレント・モード) 52

手順 4: 事前処理済の同期の設定 53

事前処理済の同期について 53

アプリケーション構成ファイルの Syncmode の設定 54

データセット・ファイルの格納 54

Oracle BI Server の構成 55

手順 5: 増分同期の設定 56

増分同期について 56

増分データセットについて 56

増分同期でのセッション変数またはフィルタの使用 57

増分同期スクリプトの例 57

## 付録 A: 構成ファイル・リファレンス 索引



# 1

## このリリースの新機能

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition は、以前 Siebel Systems 社が Siebel Business Analytics Platform として販売していたコンポーネントで構成されており、そこに大幅な機能拡張がいくつか実施されています。

『Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics 管理および構成ガイド』は、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のドキュメント・セットの一部です。このマニュアルには、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics 用のサーバーとクライアント・マシンの設定方法について、インストール後と構成に関する内容が記載されています。このマニュアルには、新しい記述だけでなく、以前に他のマニュアルで公開されていた記述があります。

Oracle BI Infrastructure をインストール、使用またはアップグレードする前に、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートに目を通すことをお勧めします。Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートは、次の場所にあります。

- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の CD-ROM
- Oracle Technology Network ([http://www.oracle.com/technology/documentation/bi\\_ee.html](http://www.oracle.com/technology/documentation/bi_ee.html)) (Oracle Technology Network の無料アカウントを登録するには、<http://www.oracle.com/technology/about/index.html> にアクセスしてください)

## 『Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics 管理および構成ガイド、リリース 10.1.3.2』に記述された新機能

表 1 に、リリース 10.1.3.2 のソフトウェアをサポートするために、このリリースのドキュメントに記述された変更内容を一覧表示します。

表 1. 『Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics 管理および構成ガイド、リリース 10.1.3.2』に記述された製品の<sup>1</sup>新機能

項	説明
すべての項	すべての項が、新しい製品名で更新されました。
「instanceconfig.xml ファイルの更新」 (18 ページ)	新規に追加された項です。同期化に使用する新しい要素に関する説明が記載されています。
「Windows シングル・サインオンで使用するための Oracle BI Disconnected Analytics の設定」 (20 ページ)	新規に追加された項です。この新機能に関する情報の参照先が記載されています。
「手順 1: 同期の構成ファイルの変更」 (50 ページ)	新規に追加された項です。同期時に使用する新しい syncconfig.xml ファイルに関する説明が記載されています。
「手順 2: Oracle BI Presentation Catalog からの更新アラートの無効化」 (52 ページ)	新規に追加された項です。エンド・ユーザーが受信するアラートを無効にする方法に関する説明が記載されています。
「手順 4: 事前処理済の同期の設定」 (53 ページ)	更新された項です。このリリースにおいて強化された、事前処理済の同期に関する説明が記載されています。
「手順 5: 増分同期の設定」 (56 ページ)	更新された項です。このリリースにおいて強化された、増分同期化に関する説明が記載されています。
付録 A 「構成ファイル・リファレンス」	更新された付録です。<dataset> 要素の変更された属性に関する説明が記載されています。



# 2

## Oracle BI Disconnected Analytics の概要

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle BI Disconnected Analytics について](#) (10 ページ)
- [Oracle BI Disconnected Analytics のアーキテクチャ \(サーバーとラップトップ\)](#) (14 ページ)

## Oracle BI Disconnected Analytics について

ネットワークに接続して Oracle Business Intelligence アプリケーションにアクセスできないときに、Oracle BI Disconnected Analytics を使用すると、分析データ、Oracle BI Interactive Dashboards およびクエリーを表示できます。切断されたユーザーは通常、Oracle Business Intelligence が実行されているサーバーに、個人用のマシン（通常はラップトップ）を接続します。Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションをダウンロードしたら、ラップトップがネットワークから切断された状態でも（出張などの場合）、ダッシュボードとクエリーを各自のラップトップ・マシン上に表示できます。切断されたマシンにおける Oracle BI Disconnected Analytics の使用方法の詳細は、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics のオンライン・ヘルプを参照してください。

11 ページの表 2 に、Oracle BI Disconnected Analytics の説明に使用される用語の定義を示します。

Oracle Business Intelligence では、次に示す切断されたソリューションがあります。

- Oracle BI ブリーフィング・ブック：切断されたユーザーは、Oracle Business Intelligence コンテンツの静的なスナップショットを各自のラップトップ上に配置して、オフライン作業時にアクセスできます。Oracle BI ブリーフィング・ブックの静的コンテンツは、レポートや軽量コンテンツの配信を管理する作業などで使用できます。Oracle BI ブリーフィング・ブックは Oracle Business Intelligence のコンポーネントとして使用でき、そのスケジュール設定と配信には iBot を使用できます。Oracle BI ブリーフィング・ブックの詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。
- 一元管理された管理対象の Oracle BI Disconnected Analytics: ネットワークベースの Oracle Business Intelligence アプリケーションが持つほとんどの機能が用意されています。ローカル・データベースにデータを移入後、切断されたユーザーはローカル・ダッシュボードにブラウザを介して接続すると、Oracle Business Intelligence 上の Oracle BI Interactive Dashboards と同じ情報が表示されます。

**注意：**このマニュアルでは、Oracle BI Disconnected Analytics は、管理対象の Oracle BI Disconnected Analytics のことを意味します。切断されたデータベースやリポジトリ、および他の切断されたコンポーネントでは、「切断された」と「ローカル」という語が同じ意味で使用されます。Oracle Business Intelligence をコンポーネントの説明で使用する文脈では、ネットワークベースの Oracle Business Intelligence アプリケーションのコンポーネントであることを意味します。たとえば、Oracle BI Server は、ネットワークベースの Oracle BI Server のことを指します。

## Oracle BI Disconnected Analytics で頻繁に使用される用語

11 ページの表 2 に、Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの開発とデプロイの説明に使用される用語の定義を示します。

表 2. Oracle BI Disconnected Analytics で頻繁に使用される用語

用語	説明
データセット	<p>切断されたマシン上の切断アプリケーションに対して、指定された一連の SQL テーブルの作成や移入を行う方法を記述した定義。データセットは、同期化操作を行う際の、分割不可でダウンロード可能なデータ単位を意味します。これによって、切断されたユーザーは、切断アプリケーションのデータを各自の切断されたマシンにダウンロードするときに、柔軟に実行できます。</p> <p>たとえば、急激に変化するファクト・テーブルは独自のデータセットを持つことがあります。また、比較的静的なディメンション・テーブルでは別のデータセットを共有することがあります。上級ユーザーは、ダウンロードするデータセットを同期の際に選択（Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager の「Advanced」タブを使用）する場合がありますし、経験の浅いユーザーはデフォルトのデータセットを選択する場合があります。</p>
Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager	<p>切断されたマシン上の切断アプリケーションの同期化、起動および削除に使用するユーティリティ・プログラム。</p> <p>詳細は、「<a href="#">Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager</a>」（14 ページ）を参照してください。</p>
切断されたアプリケーション	<p>完全に自己完結型の Oracle Business Intelligence アプリケーション（切断されたマシン上で実行）。アプリケーション・データは SQL Anywhere 切断データベースにあります。Oracle Business Intelligence メタデータは切断リポジトリにあります。また、Oracle Business Intelligence メタデータはローカルの Oracle BI Presentation Catalog にもあります。</p>
切断されたアプリケーションの構成ファイル	<p>特定の切断されたアプリケーションを定義する XML 形式ファイル。ソース・クエリと SQL スクリプト・ファイルをデータセットに関連付ける情報や、切断されたリポジトリとローカルの Oracle BI Presentation Catalog の場所を識別する情報などが記述されます。</p>
切断されたマシン	<p>Oracle Business Intelligence が切断オプションでインストールされたマシン（通常はラップトップ）。切断されたユーザーは、このマシンから Oracle BI Server に接続し、同期化操作を実行して切断されたアプリケーションをダウンロードします。</p>
切断されたリポジトリ	<p>切断されたアプリケーション用のリポジトリ。同期化操作時に、Oracle BI Server から切断されたマシンにダウンロードされます。</p>
ローカル Oracle BI Presentation Catalog	<p>切断されたアプリケーション用のローカル・カタログ。同期化操作時に、Oracle BI Server から切断されたマシンにダウンロードされます。</p>

表 2. Oracle BI Disconnected Analytics で頻繁に使用される用語

用語	説明
完全な Oracle BI Presentation Catalog	Oracle BI Server 上に配置された Oracle BI Presentation Catalog。
Oracle Business Intelligence アプリケーション	フルセット版の Oracle Business Intelligence アプリケーション (Oracle BI Server 上で実行)。切断されたアプリケーションは、シングル・ユーザー用に構成された Oracle Business Intelligence アプリケーションです。通常、格納されるクエリー (レポート)、ダッシュボードおよびデータ・サブセットの数は少なくなります。
エンタープライズ・リポジトリ	エンタープライズ・アプリケーション用の分析リポジトリ。
Oracle BI Server	完全バージョン (切断されたバージョンではない) の Oracle Business Intelligence を実行し、アプリケーションのホストとなる中核的なマシン。切断されたユーザーは、各自の切断されたマシンを Oracle BI Server に接続し、切断されたアプリケーションをダウンロードします。
完全データセット	ある時点における特定の切断されたアプリケーションの全データを表すデータセット。それ以降の増分更新は、増分データセットによって定義されます。
増分データセット	完全データセット後に生成された追加データを定義するデータセット。増分データセットでは、タイムスタンプの比較によって、ユーザーが必要とするデータの部分が決まり、該当するデータのみが生成されます。最初の同期化操作では、完全データセットと増分データセットは同じで、完全データセットがダウンロードされます。
ソース・クエリー (レポート)	Oracle BI Server 上の Oracle BI Presentation Catalog に格納されているクエリーで、切断されたアプリケーションにダウンロードするデータ・ファイルの生成に使用されます。  詳細は、「 <a href="#">切断されたアプリケーション用のソース・クエリー</a> 」(13 ページ)を参照してください。
SQL スクリプト・ファイル	切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースにテーブルと索引を作成して移入する SQL コマンドが記述されたファイル。  詳細は、「 <a href="#">切断されたアプリケーション用の SQL スクリプト</a> 」(13 ページ)を参照してください。
同期化操作	切断されたマシン上の切断アプリケーションを、Oracle BI Server 上の対応するアプリケーションに同期化するメカニズム。この操作によって実行される処理の一部を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle BI Server で生成または格納されたデータ・ファイルを、切断されたマシンにダウンロードする処理</li> <li>■ 切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースに、それらのファイルをロードする処理</li> <li>■ 切断されたリポジトリをダウンロードする処理</li> <li>■ ローカル Oracle BI Presentation Catalog のダウンロード</li> </ul>

## 切断された環境とネットワーク環境との相違点

切断されたマシン（通常はラップトップ）上の Oracle Business Intelligence 環境は、論理的に、Oracle BI Server 上で実行される Oracle Business Intelligence 環境に相当します。ただし、切断された環境は、シングル・ユーザー用にスケール・ダウンされています。ラップトップでは、各自のデータが SQL Anywhere データベースに格納されます。また、リポジトリにアクセスするフルセット版 Oracle BI Server と、ローカル Oracle BI Presentation Catalog にアクセスするフルセット版 Oracle BI Presentation Services も格納されます。

切断された環境とネットワーク環境との間における主要な相違点を次に示します。

- **データ**：切断されたアプリケーションがアクセスする SQL Anywhere 切断データベースのデータは、最終的にはネットワーク・アプリケーションから取得されます（ソース・クエリーを介して取得）。ただし、一般的に、フィルタと集計を使用してそのサイズは小さくなります。
- **リポジトリ**：通常、切断されたリポジトリのサイズは、サーバー上のリポジトリよりもかなり小さいですが、切断されたアプリケーション用に特別に設計された新しいメタデータが格納される場合があります。したがって、切断されたリポジトリは、サーバー・リポジトリの厳密に定義されたサブセットではありません。
- **Oracle BI Presentation Catalog**：同様に、ローカル Oracle BI Presentation Catalog のサイズは、通常、完全な Oracle BI Presentation Catalog よりもかなり小さいです。ただし、切断されたアプリケーション用に新しいダッシュボードやクエリー（レポート）などのローカル・カスタマイズが保存されることもあります。

**注意**：ソース・クエリー（レポート）は、Oracle BI Interactive Dashboards に表示される標準的なレポートと同じではありません。ソース・クエリーの目的は、切断されたマシンへのデータの移入に限定されます。

## 切断されたアプリケーション用の SQL スクリプト

切断されたマシン上に SQL Anywhere テーブルを作成（必要に応じてそれらのテーブル用索引も生成）するには、適切な SQL コマンドのスクリプトを作成する必要があります。テーブルごとに対応するスクリプト・ファイルが個別に必要です。特定のテーブルのすべての索引では、個別のスクリプト・ファイルが共有されます。SQL スクリプト・ファイルの詳細は、「[手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト](#)」（24 ページ）を参照してください。

## 切断されたアプリケーション用のソース・クエリー

ソース・クエリーにより、切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースに格納するデータが生成されます。ソース・クエリーは、Oracle Business Intelligence を使用して作成し、完全な Oracle BI Presentation Catalog に格納します。ソース・クエリーは、Oracle BI Presentation Catalog に格納されている他のクエリー（リクエスト）と実質的に違いはありません。切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースに移入する目的でのみ使用されることが、他のクエリーと異なります。

各ソース・クエリーは、切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースにある特定のテーブルに対応します。そのため、ソース・クエリーにおける列の順序、数および型は、関連付けられているテーブルの列の順序、数および型に完全に一致する必要があります。ソース・クエリーの詳細は、「[手順 5: Oracle BI Disconnected Analytics 用のソース・クエリーの定義](#)」（30 ページ）を参照してください。

## Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager

Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager は切断されたマシン上で実行され、Oracle BI Server 上で実行されている Oracle Business Intelligence と連携してダウンロード・プロセスが調整されます。Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager は、Oracle BI Disconnected Analytics のインストール時にラップトップにインストールされます。これによって、切断されたユーザーは、テーブルとアプリケーション・データをラップトップのデータベースにダウンロードできます。ただし、ラップトップから Oracle BI Server へのデータのアップロードには使用しません。Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager の使用方法の詳細は、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics のオンライン・ヘルプを参照してください。

**警告：** DAD ファイルは編集しないでください。Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager は、DAD ファイル拡張子に関連付けられています。

## Oracle BI Disconnected Analytics のアーキテクチャ（サーバーとラップトップ）

図 1 に、Oracle BI Disconnected Analytics の一般的なアーキテクチャを示します。2 つの Analytics プラットフォームが使用され、それぞれに 1 組のコンポーネントがあります。1 つのプラットフォームは Oracle BI Server 上にあり、別のプラットフォームは切断されたマシン上にあります。Oracle BI Server コンポーネントと切断されたサーバー・コンポーネントとの違いは、切断されたコンポーネントはシングル・ユーザー用に構成されている点にあります。

15 ページの図 1 に使用されている記号の意味を次に説明します。

- 円筒形のディスク記号は、ディスクに格納されているファイルを表します。
- 四角形の枠は、Oracle Business Intelligence に関連する処理を表します。
- 矢印付きの実線は、(切断されたマシンまたは Oracle BI Server 上の)Oracle Business Intelligence 構成における通常のデータ・フローを表します。
- 矢印付の点線は、同期化操作時における Oracle BI Server から切断されたマシンへのデータ・フローを表します。

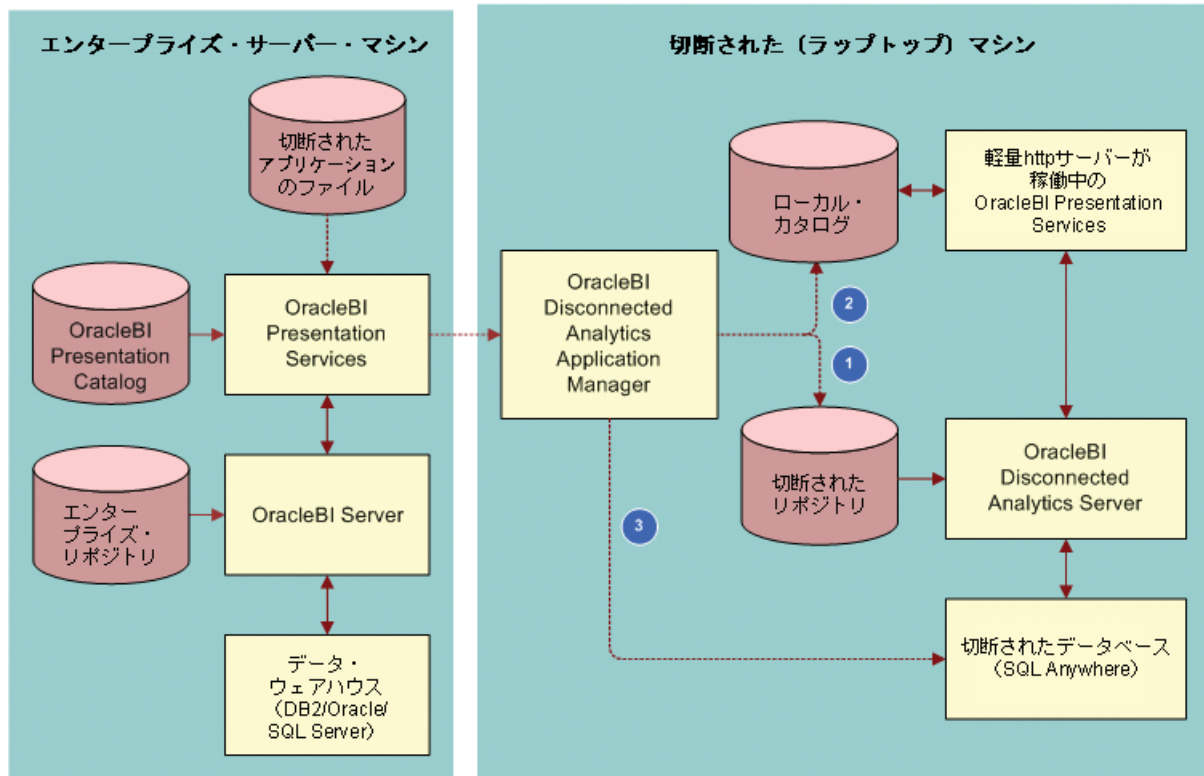


図 1. Oracle BI Disconnected Analytics のアーキテクチャ

## Oracle BI Disconnected Analytics の使用例

通常、Oracle BI Disconnected Analytics ユーザーは、Oracle BI Server 上の Oracle Business Intelligence にログインしてから切断されたページを開き、ダウンロード対象の切断されたアプリケーションを選択します。Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager が切断されたマシン上で起動されて、Oracle Business Intelligence との連携調整が始まり、切断されたアプリケーションがダウンロードされます。15 ページの図 1 に、この使用例を示します。

「切断されたアプリケーションのファイル」と書かれたディスクは、切断されたリポジトリ、ローカルの Oracle BI Presentation Catalog、および切断されたアプリケーションに関連付けられた SQL スクリプトがある Oracle BI Server 上の場所を表します。15 ページの図 1 の点線の番号は、次の箇条書き番号に対応しています。

- 1 Oracle BI Server 上の Oracle Business Intelligence により、切断されたリポジトリのコピーが Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager に送信されます。受信した切断リポジトリは切断されたマシン上の適切な場所に格納されます。また、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager では、切断されたリポジトリが参照されるように、切断されたマシン上の Oracle BI Server 構成ファイル (NQSConfig.INI) も変更されます。

- 2 Oracle BI Server上のOracle Business Intelligenceでは、ローカルOracle BI Presentation CatalogのコピーがOracle BI Disconnected Analytics Application Managerに送信されます。完全なOracle BI Presentation Catalogの共有コンテンツにより、ローカル・カタログのコンテンツが置換され、切断されたマシン上の適切な場所のローカル・カタログに格納されます。ローカル共有コンテンツ内のレポートが置換されたり削除されないようにするには、必要なレポートを事前にカタログ内の個人用「My Folder」にコピーします。
- 3 Oracle BI Server上のOracle Business Intelligenceでは、SQLスクリプトと、ソース・クエリーから生成されたデータ・ファイルがOracle BI Disconnected Analytics Application Managerにダウンロードされます。Oracle BI Disconnected Analytics Application Managerでは、SQLスクリプトを実行してSQL Anywhereテーブルが作成され、テーブルがデータ・ファイルからロードされます。

同期化操作が正常に完了した場合、ユーザーはOracle BI Disconnected Analytics Application Managerの「Start」ボタンをクリックして、切断されたアプリケーションを切断されたマシン上で起動できます。ただし、複数のアプリケーションを切断されたマシンにダウンロードできますが、一度に実行できるアプリケーションは1つのみであることに注意してください。Oracle BI Disconnected Analyticsでは、複数アプリケーションの同時実行はサポートされていません。したがって、特定の切断されたアプリケーションを起動すると、現在実行中の切断されたアプリケーションは停止します。



# 3

## Oracle BI Disconnected Analytics の設定

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle BI Disconnected Analytics クライアントのインストール \(18 ページ\)](#)
- [instanceconfig.xml ファイルの更新 \(18 ページ\)](#)
- [Oracle BI Disconnected Analytics による ODBC DSN 用認証の構成 \(19 ページ\)](#)
- [切断されたクライアントに対する Sun ONE Web サーバーの構成 \(20 ページ\)](#)
- [Windows シングル・サインオンで使用するための Oracle BI Disconnected Analytics の設定 \(20 ページ\)](#)

# Oracle BI Disconnected Analytics クライアントのインストール

最初の手順は、Oracle BI Disconnected Analytics のインストールです。これには、次のインストールを別に実行する必要があります。

- **標準のOracle Business Intelligenceインストール**: Oracle Business Intelligenceをネットワーク上にインストールし、[第4章「Oracle BI Disconnected Analytics のアプリケーションの準備」](#)の作業を完了して Oracle BI Disconnected Analytics のインストールを準備する必要があります。

インストールの詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

- **Oracle BI Disconnected Analytics クライアントのインストール**: デプロイするアプリケーションを準備したら、切断されたアプリケーションへのアクセスが必要な各マシンに Oracle BI Disconnected Analytics クライアントをインストールする必要があります。

Oracle BI Disconnected Analytics を購入されている場合は、インストーラではインストール時にライセンス・キーで検出されます。最適な設定タイプの選択を求める画面で、「Oracle BI Disconnected Analytics Client」を選択します。

個々のマシンにインストールする方法の詳細は、[第5章「Oracle BI Disconnected Analytics へのアプリケーションのデプロイ」](#)および『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

**注意**: Oracle BI Disconnected Analytics は、Oracle Business Intelligence と同時にインストールされません。両方の製品を同じマシンにインストールすることはできません。

## instanceconfig.xml ファイルの更新

Oracle BI Server の instanceconfig.xml ファイルに、次の要素が正しく記述されていることを確認します。このファイルは、Oracle Application Server Control または JConsole を使用して更新できます。

- **<DisconnectedDir>**: Oracle BI Disconnected Analytics が以前インストールされており、Oracle BI Disconnected Analytics のデフォルト・ディレクトリ名が Oracle BI Server で使用されていない場合は、デフォルトでないそのディレクトリの名前が Windows の DisconnectedDirRegistry 設定に格納されます。現行リリースの Oracle BI Disconnected Analytics にアップグレードする場合は、このリリースを使用する前に、デフォルトでないそのディレクトリの名前を instanceconfig.xml ファイルの <DisconnectedDir> 要素で指定する必要があります。
- **<ArchiveAlerts>**: エンド・ユーザーがアプリケーションを同期化するとき、Oracle BI Server の Oracle BI Interactive Dashboards と同じアラートがローカル・ダッシュボードに表示されます。これらのアラートの表示を無効にするには、「[手順 2: Oracle BI Presentation Catalog からの更新アラートの無効化](#)」(52 ページ)の説明に従って <ArchiveAlerts> 要素を使用します。
- **<HashChars>**: この要素は、事前処理済の同期の一部として使用します。詳細は、「[手順 4: 事前処理済の同期の設定](#)」(53 ページ)を参照してください。
- **<UseRequestKey>**: この要素は、事前処理済の同期の一部として使用します。詳細は、「[手順 4: 事前処理済の同期の設定](#)」(53 ページ)を参照してください。

## Oracle BI Disconnected Analytics による ODBC DSN 用認証の構成

Windows オペレーティング・システムでは、Oracle BI Disconnected Analytics は認証用に構成されている必要があります。切断されたユーザーが Oracle BI Disconnected Analytics にログオンすると、そのユーザーのユーザー名とパスワードは常に SQL Anywhere を使用してトランザクション・データベース・テーブルに対して認証されます。切断されたクライアントが統合環境で動作するには、ODBC データソース名 (ODBC DSN) をクライアント・マシンで構成する必要があります。

ODBC を構成する場合は、次の点に注意してください。

- OLTP と OLAP は必ず別々のデータベースに配置します。
- リフレッシュ間隔を最小に設定します。
- Oracle BI Interactive Dashboards を実行中は、リフレッシュ操作を行わないでください。
- 前述の注意事項に基づいて Max 接続パラメータを設定します。

次の構成手順を実行して、切断されたクライアントと切断されたクライアントのトランザクション・データベース間において接続を確立します。

### Oracle BI Disconnected Analytics に対して ODBC DSN を構成するには

- 1 Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「管理ツール」→「データ ソース (ODBC)」にナビゲートします。  
「システム DSN」タブをクリックします。
- 2 「追加」ボタンをクリックします。
- 3 「Adaptive Server Anywhere 9.0」を選択します。  
「完了」をクリックします。
- 4 「データ ソース名」フィールドに、SIEBEL\_OLTP と入力します。  
**注意：**ユーザーに適切な Analytics 職責が選択されていることを確認します。
- 5 「データベース」タブをクリックし、「参照」をクリックします。  
「データベース ファイル」フィールドで、クライアント・マシン上のローカル・データベースをポイントします。
- 6 「OK」をクリックして管理ツールを終了します。

## 切断されたクライアントに対する Sun ONE Web サーバーの構成

切断されたマシンをサポートする Web サーバーとして Solaris 上で Sun ONE を使用する場合は、次の手順に従って、さらに Sun ONE Web サーバーを構成する必要があります。

**注意：**このサード・パーティ製品の名前は Sun ONE ですが、インストール・パスとディレクトリには旧名の iPlanet が使用されています。この手順では、Sun ONE が \$INSTALLDIR にインストールされていることが前提です。

### 切断されたクライアントに対する Web サーバーとして Sun ONE を構成するには

1 /\$INSTALLDIR/https-localhost/config ディレクトリにある server.xml ファイルを開きます。

2 server.xml ファイルで、次の行を変更します。

```
<CONNECTIONGROUP id="group1" matchingip="default" servername="localhost"
defaultvs="https-localhost"/> NOTICE: servername is localhost
```

前述の行を次のように変更します。

```
<CONNECTIONGROUP id="group1" matchingip="default" servername="<machine_name>"
defaultvs="https-localhost"/> NOTICE: servername is actual name of the machine.
```

3 server.xml ファイルを保存し閉じます。

## Windows シングル・サインオンで使用するための Oracle BI Disconnected Analytics の設定

シングル・サインオン機能を Web サーバーから使用するよう Oracle Business Intelligence を設定できます。この機能を設定すると、ユーザーは切断されたアプリケーションの同期が必要なときにログインする必要がなくなります。Oracle BI Disconnected Analytics に対するシングル・サインオンを有効にするには、「[手順 1: 同期の構成ファイルの変更](#)」(50 ページ)の説明に従って、synconfig.xml ファイルを適切に設定します。

シングル・サインオンの詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

# 4

## Oracle BI Disconnected Analytics のアプリケーションの準備

Oracle BI Disconnected Analytics の各アプリケーションには、リポジトリやカタログなどのコンポーネントが複数ありますが、それらは Oracle BI Server 上の同種のコンポーネントとは若干異なります。Oracle BI Disconnected Analytics ではローカル・プラットフォーム機能とユーティリティがいくつか用意されているだけなので、Oracle BI 管理者は、切断されたアプリケーションをそれぞれ準備する必要があります。この準備は、切断されたデータベース、カスタマイズされた切断リポジトリ、ローカル Oracle BI Presentation Catalog、データのダウンロードに使用するソース・クエリー、および DDL（データ定義言語）ファイルを作成することで行います。アプリケーションを準備したら、アプリケーションのテストとデプロイができます。詳細は、[第 5 章「Oracle BI Disconnected Analytics へのアプリケーションのデプロイ」](#)を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- [手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握 \(22 ページ\)](#)
- [手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト \(24 ページ\)](#)
- [手順 3: 切断されたリポジトリの作成と格納 \(26 ページ\)](#)
- [手順 4: ローカル Oracle BI Presentation Catalog の作成 \(29 ページ\)](#)
- [手順 5: Oracle BI Disconnected Analytics 用のソース・クエリーの定義 \(30 ページ\)](#)
- [手順 6: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルの作成 \(32 ページ\)](#)
- [データセット定義の操作 \(33 ページ\)](#)
- [アプリケーション構成ファイルの例 \(39 ページ\)](#)
- [Oracle BI Server からのアプリケーションの削除 \(42 ページ\)](#)

## 手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握

Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションに関連付けられるすべてのファイルは、Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造内において所定の場所に存在する必要があります。

この項では、Oracle BI Server 上のディレクトリとサブディレクトリについて説明します。それらのディレクトリとサブディレクトリには、Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーション関連のファイルが配置されます。次に、Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の例を示します。

D:\¥OracleBIData	(データ・インストール・ディレクトリ)
Disconnected	(<ProductName> ディレクトリ)
MyApp	(アプリケーション・ディレクトリ)
app	(アプリケーション・メタデータ・ディレクトリ)
data	(アプリケーション・データ・ディレクトリ)
messages	(アプリケーション・メッセージ・ディレクトリ)
MyApp.xml	(この切断されたアプリケーション用の構成ファイル)
YourApp	
app	
data	
messages	
YourApp.xml	

### データ・インストール・ディレクトリ

Oracle Business Intelligence のインストール時に、Oracle Business Intelligence データを格納するディレクトリ (データ・インストール・ディレクトリ) を選択します。たとえば、次のディレクトリをデータ・インストール・ディレクトリとして選択できます。

D:\¥OracleBIData

### 切断されたディレクトリ

切断されたアプリケーションは、データ・インストール・ディレクトリ下の Disconnected サブディレクトリ (切断されたディレクトリ) に配置されます。切断されたディレクトリ構造の前述の例では、切断されたアプリケーションは D:\¥OracleBIData¥Disconnected にあります。

## 切断されたアプリケーションのディレクトリ

Oracle BI Disconnected Analytics の各アプリケーションには、切断されたディレクトリ内に、関連するサブディレクトリ（切断されたアプリケーションのディレクトリ）があります。切断されたディレクトリ構造の前述の例では、MyApp という名前のアプリケーションの場合、そのすべてのファイルが

D:\OracleBIData\Disconnected\MyApp サブディレクトリに格納されます。また、切断されたアプリケーション固有の構成ファイル（ファイル名は MyApp.xml）も格納されます。同様に、YourApp という名前のアプリケーションの場合、そのすべてのファイルが D:\OracleBIData\Disconnected\YourApp サブディレクトリに格納されます。また、切断されたアプリケーション固有の構成ファイル（ファイル名は YourApp.xml）も格納されます。

**注意：** Oracle BI Interactive Dashboards では Disconnected サブディレクトリを調べることで、ユーザーが使用できる Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションを特定して一覧表示します。アプリケーション定義ファイルとアプリケーション・サブディレクトリがある場合、Oracle BI Interactive Dashboards では定義ファイルが読み取られ、アプリケーションが一覧表示されます。アプリケーションを非表示にするには、適切なアプリケーション・サブディレクトリを Disconnected サブディレクトリから削除します。

## 切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリ

切断されたアプリケーションの各ディレクトリには、切断されたアプリケーションのメタデータ・ファイル（リポジトリ、カタログおよび SQL スクリプト・ファイル）が格納されるサブディレクトリ（切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリ）があります。慣習的に、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリの名前は app ですが、変更も可能です。切断されたディレクトリ構造の前述の例では、切断されたアプリケーション（MyApp アプリケーション）のメタデータ・ファイルは

D:\OracleBIData\Disconnected\MyApp\app にあります。

## 切断されたアプリケーションのデータ・ディレクトリ

切断されたアプリケーションの各ディレクトリには、切断されたアプリケーションのデータ・ファイル（外部生成のデータ・ファイルと事前処理済のデータ・ファイル）が格納されるサブディレクトリ（切断されたアプリケーションのデータ・ディレクトリ）が別にあります。慣習的に、切断されたアプリケーションのデータ・ディレクトリの名前は data ですが、変更も可能です。切断されたディレクトリ構造の前述の例では、切断されたアプリケーション（MyApp アプリケーション）のデータ・ファイルは

D:\OracleBIData\Disconnected\MyApp\data にあります。

## 切断されたアプリケーションのメッセージ・ディレクトリ

切断されたアプリケーションの各ディレクトリには、さらに別のサブディレクトリ（切断されたアプリケーションのメッセージ・ディレクトリ）があります。このサブディレクトリには、アプリケーションのローカル Oracle BI Presentation Catalog によって使用されるメッセージ・ローカライゼーション XML ファイルが格納されます。慣習的に、切断されたアプリケーションのメッセージ・ディレクトリの名前は messages ですが、変更も可能です。切断されたディレクトリ構造の前述の例では、MyApp アプリケーションのメッセージ・ローカライゼーション XML ファイルは、D:\OracleBIData\Disconnected\MyApp\messages にあります。

## 切断されたアプリケーションの構成ファイル

詳細は、「[手順 6: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルの作成](#)」（32 ページ）を参照してください。

## 手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト

切断されたマシンにデータをダウンロードする前に、SQL Anywhere データベースに適切なテーブルを設定する必要があります。

**注意:** SQL Anywhere を使用して、切断されたテーブルの作成 (DDL スクリプト) をテストします。

アプリケーション構成ファイルを作成するときに、これらのスクリプトへのポインタを追加します。Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager で同期化操作が行われると、データベースのテーブルが新規に作成されるか上書きされます。

切断されたテーブルと索引を作成してテストするには、次の各項に記載されたガイドラインに従ってください。

- [SQL スクリプトの作成 \(24 ページ\)](#)
- [SQL スクリプトを使用して切断されたテーブルと索引を作成する例 \(24 ページ\)](#)
- [切断されたテーブルと索引を作成する SQL スクリプトのテスト \(26 ページ\)](#)
- [切断されたディレクトリへの SQL スクリプトの格納 \(26 ページ\)](#)

### SQL スクリプトの作成

次の作業を実行して、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager が切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースにテーブルと索引を作成できるようにする必要があります。

- Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションに必要なテーブルと索引を調べて決定する作業。
- 対応するスクリプトを作成する作業。各テーブルに対応するスクリプトを 1 つ作成します。必要に応じて、特定のテーブルのすべての索引に対して、スクリプトを 1 つ作成することもできます。

SQL Anywhere の SQL 構文の詳細は、ドキュメント (『Adaptive Server Anywhere, SQL Reference』) を Sybase 社の Web サイトからダウンロードするか、Sybase 社に問い合せてドキュメントの送付を依頼してください。

### SQL スクリプトを使用して切断されたテーブルと索引を作成する例

簡単な小売りビジネス・アプリケーションで、販売された製品と販売店舗のみを追跡管理すると仮定します。このアプリケーションの切断されたバージョンは、2 つのディメンション・テーブル (Product と Store) と、核となるファクト・テーブル (SalesFact) から構成されます。切断されたアプリケーションでは、これらの 3 つの各テーブルに、それぞれ対応する SQL スクリプト・ファイルが必要となります。

この項では、これらの 3 つのテーブルの SQL スクリプト・ファイルについて説明します。



### Product.sql

```
drop table Product;

create table Product (
    P_ID integer,
    P_Name char(30),
);
```

### Store.sql

```
drop table Store;

create table Store (
    S_ID integer,
    S_Name char(30),
    S_City char(20),
    S_State char(2)
);
```

### SalesFact.sql

```
drop table SalesFact;

create table SalesFact (
    F_ProductID integer,
    F_StoreID integer,
    F_Timestamp datetime,
    F_Quantity smallint,
    F_Price smallint
);
```

必要に応じて、Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションでは、特定のテーブルに対して索引を 1 つ以上作成する SQL スクリプト・ファイルを持つ場合があります。前述の簡単な小売リビジネス・アプリケーションの例を引き続き使用して、Product テーブルの P\_Name 列に索引を作成する SQL スクリプトについて説明します。

### ProductIdx.sql

```
drop index ProductIX;

create index ProductIX on Product (P_Name);
```

## 切断されたテーブルと索引を作成する SQL スクリプトのテスト

SQL スクリプトのテストには、Sybase Interactive SQL ユーティリティ (dbisql.exe) を使用できます。このユーティリティの使用の詳細は、Sybase 社の関連ドキュメントを参照してください。関連ドキュメントを Sybase 社の Web サイトからダウンロードして Interactive SQL ユーティリティを検索するか、Sybase 社に問い合わせてドキュメントの送付を依頼してください。

## 切断されたディレクトリへの SQL スクリプトの格納

スクリプトのテストに成功したら、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリに格納できます。前述の簡単な小売ビジネス・アプリケーションの例では、このディレクトリは D:\OracleBIData\DisconnectedRetail\app になります。切断されたディレクトリの詳細は、「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) を参照してください。

## 手順 3: 切断されたりポジトリの作成と格納

切断されたオフライン・リポジトリ (切断されたマシン用のリポジトリ) を作成するには、Oracle BI Server 上のリポジトリを開始ポイントとして使用します。ただし、切断された各アプリケーションにはそれぞれ異なる要件があるため、この項では、すべての切断されたりポジトリに必要な変更項目について説明します。リポジトリの作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』のリポジトリ設定の章を参照してください。

**注意:** 切断されたりポジトリは複雑にしないでサイズを小さくすること (20MB を超えないサイズ) をお勧めします。クライアント環境のパフォーマンスに影響する場合があります。

開発目的の場合、切断されたりポジトリの設定とテストには、ラップトップを使用して、切断されたユーザーの環境と可能な限り同じにします。

次の各項で、切断されたりポジトリに必要な変更項目について説明します。

- [データベース・タイプと接続プールの割当て](#) (26 ページ)
- [切断されたりポジトリのテストと格納](#) (28 ページ)

## データベース・タイプと接続プールの割当て

ここでは、データベースと切断された接続プールのプロパティに対する Oracle BI Disconnected Analytics 固有の設定について説明します。

- 切断されたマシン上のデータベースは必ず SQL Anywhere になるため、切断された各リポジトリの物理レイヤーでは、データベース・タイプを SQL Anywhere に設定する必要があります。図 2 に、データベース・タイプを SQL Anywhere に設定するオプションを示します。「CRM metadata tables」チェック・ボックスと「Virtual Private Database」チェック・ボックスは、Oracle BI Disconnected Analytics には適用されないため、選択が解除されたままにできます。

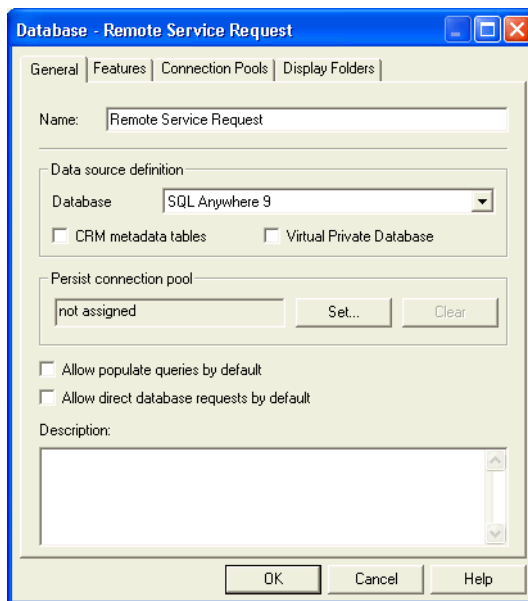


図 2. 切断されたデータソースの定義

- 図 3 に、「Connection Pool」ダイアログ・ボックスの接続プール・パラメータを示します。

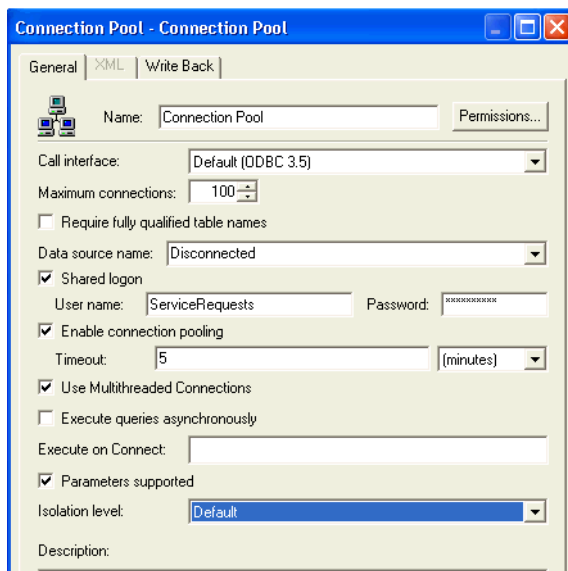


図 3. 切断された接続プールのプロパティ

- 接続プールのデータソース名は、Disconnected にする必要があります。理由は、Oracle BI Disconnected Analytics のインストール時に、このデータソース名を使用するようクライアント・ラップトップが構成されるためです。
- Oracle BI Disconnected Analytics とともにライセンスされる SQL Anywhere パーソナル・データベース・サーバーでは、最大データベース同時接続数は 10 です。したがって、Oracle BI Disconnected Analytics に RPD を設定するときは、「Maximum Connections」値を 10 以下にしてください。
- 接続プールのユーザー名とパスワードは、Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの名前と同じにする必要があります。アプリケーション名はアプリケーション構成ファイルで指定されており、ユーザー名とパスワードは一致する必要があります。詳細は、「[手順 6: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルの作成](#)」(32 ページ) を参照してください。
- Oracle BI Disconnected Analytics のユーザーは、切断されたデータベースのユーザー名とパスワードを知る必要はありません。共通のユーザー名（デフォルトでは Administrator）をリポジトリに定義しておくこと、Oracle BI Disconnected Analytics ユーザーはこのユーザー名を使用して各自の切断されたアプリケーションにログインできます。
- 認証目的の場合は、すべての切断されたユーザーが各自の Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションへの接続に使用する標準ユーザー名を、切断されたりポジトリに追加できます。
- データは、各ユーザーの名前とパスワードを使用して Oracle BI Server から抽出されるため、必ずパーソナライズ化されます。
- Oracle Siebel の業務系アプリケーションがリモートで使用されている場合は、認証目的で個別の接続を設定できます。この接続設定に使用するユーザー名とパスワードは、:USER と :PASSWORD にする必要があります。これらの変数の値は、認証目的で使用できます。リポジトリ変数の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。
- データベース・テーブルの列名では、# などの特殊文字は使用できません。ファクト・テーブルの列名では英数字のみ使用してください。

## 切断されたりポジトリのテストと格納

切断されたりポジトリをテストし、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリに格納します。「[手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト](#)」(24 ページ) に記載された簡単な小売りビジネス・アプリケーションの例では、格納先は D:\OracleBIData\DisconnectedRetailApp になります。切断されたディレクトリの詳細は、「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) を参照してください。

切断されたりポジトリのテストで使用できる高度な手順の一覧を次に示します。

- 切断されたりポジトリのテストに使用するマシンを決めます。このマシンは、ネットワーク・サーバーでもラップトップでもかまいません。
- Oracle BI Disconnected Analytics クライアントをこのマシンにインストールします。このインストールによって、シングル・ユーザー用にスケール・ダウンされた切断バージョンの Oracle BI Server が作成されます。
- dbisqlc.exe を使用して、切断されたデータベースをこのマシンに作成し、手動でテーブルを作成します。

- 切断されたりポジトリを Oracle BI Server にデプロイします。それには、切断されたりポジトリをポイントするように NQSCONFIG.INI ファイルを更新します。NQSCONFIG.INI ファイル内の要素の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- Oracle BI Disconnected Analytics クライアントを使用してサーバー（デフォルト DSN 名は Analytics Web）に接続し、スキーマを表示します。  
**警告:** Oracle BI Interactive Dashboards はこの時点で使用しないでください。
- 「Presentation」レイヤーに基づいてサンプルの論理 SQL レポートを実行します。テーブルにはデータが移入されていないため、データは返されません。ただし、この作業により使用しているリポジトリの一貫性をテストできます。

## 手順 4: ローカル Oracle BI Presentation Catalog の作成

ローカル Oracle BI Presentation Catalog（切断されたマシン用のカタログ）を作成するには、カタログに格納するダッシュボードとクエリー（レポート）の作成方法が判明している必要があります。詳細は、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

ローカル Oracle BI Presentation Catalog を作成するには、Oracle BI Server 上の完全な Oracle BI Presentation Catalog を開始ポイントとして使用し、切断されたアプリケーションに不要なダッシュボードとレポートを削除します。切断されたアプリケーションに必要なダッシュボードとレポートの数が少ない場合は、かわりに新規にローカル Oracle BI Presentation Catalog を手動で作成する方法も選択できます。

ローカル Oracle BI Presentation Catalog を作成したら、次の手順を実行します。

- 作成したカタログを、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリに格納します。「[手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト](#)」（24 ページ）に記載された簡単な小売りビジネス・アプリケーションの例では、格納先は D:\OracleBIData\Disconnected\Retail\app になります。切断されたディレクトリの詳細は、「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」（22 ページ）を参照してください。
- カatalogの %shared フォルダをアーカイブします。アーカイブされたファイルは、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリにコピーされます。カタログのアーカイブ方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

## 手順 5: Oracle BI Disconnected Analytics 用のソース・クエリーの定義

ソース・クエリーは分析リクエストであり、Answers で作成され、Oracle BI Server 上の完全な Oracle BI Presentation Catalog に格納されます。ソース・クエリーのデザインは、切断されたデータベース・テーブルのスキーマに対応付けられますが、各自の業務内容に応じたものにします。

ソース・クエリーは、一意の識別子によって、Oracle BI Presentation Catalog に格納されている他のクエリーと区別されます。ソース・クエリーは、Oracle BI Server 上の Answers (Oracle Business Intelligence) で作成され、実行されると切断マシン上の SQL Anywhere データベースにデータが移入されます。リクエストを Answers で作成する方法の詳細は、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

31 ページの図 4 に、ソース・クエリーを使用して Oracle BI Server 上のリポジトリから切断されたテーブルにデータに移入する仕組みを示します。切断されたユーザーがアプリケーション・データをダウンロードすると、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager によって、Oracle BI Server 上のソース・クエリーが実行されます。Oracle Business Intelligence ではソース・クエリーが実行され、そのデータをダウンロード用に圧縮します。ダウンロード操作とその後の SQL Anywhere 切断データベースへのロードは、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager によって実行されます。

データは切断されたマシンにダウンロードされますが、その際にソース・クエリーと Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager が使用されます。Oracle BI 管理者は、特定のアプリケーション用にデータをダウンロードするソース・クエリーを作成します。ソース・クエリーは Answers で作成し、Oracle BI Presentation Catalog に格納し、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager が実行するアプリケーション構成ファイルから実行されます。

切断されたユーザーがダウンロード（同期化）をリクエストすると、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager によって、リクエストが Oracle BI Server に送信されます。Oracle Business Intelligence では、該当するソース・クエリーが Oracle BI Server に対して発行され、データを取得してデータセットにパッケージ化します。次に、Oracle Business Intelligence では、アプリケーション・データが切断されたユーザーの切断データベースに返され、切断データベース・テーブルに移入されます。

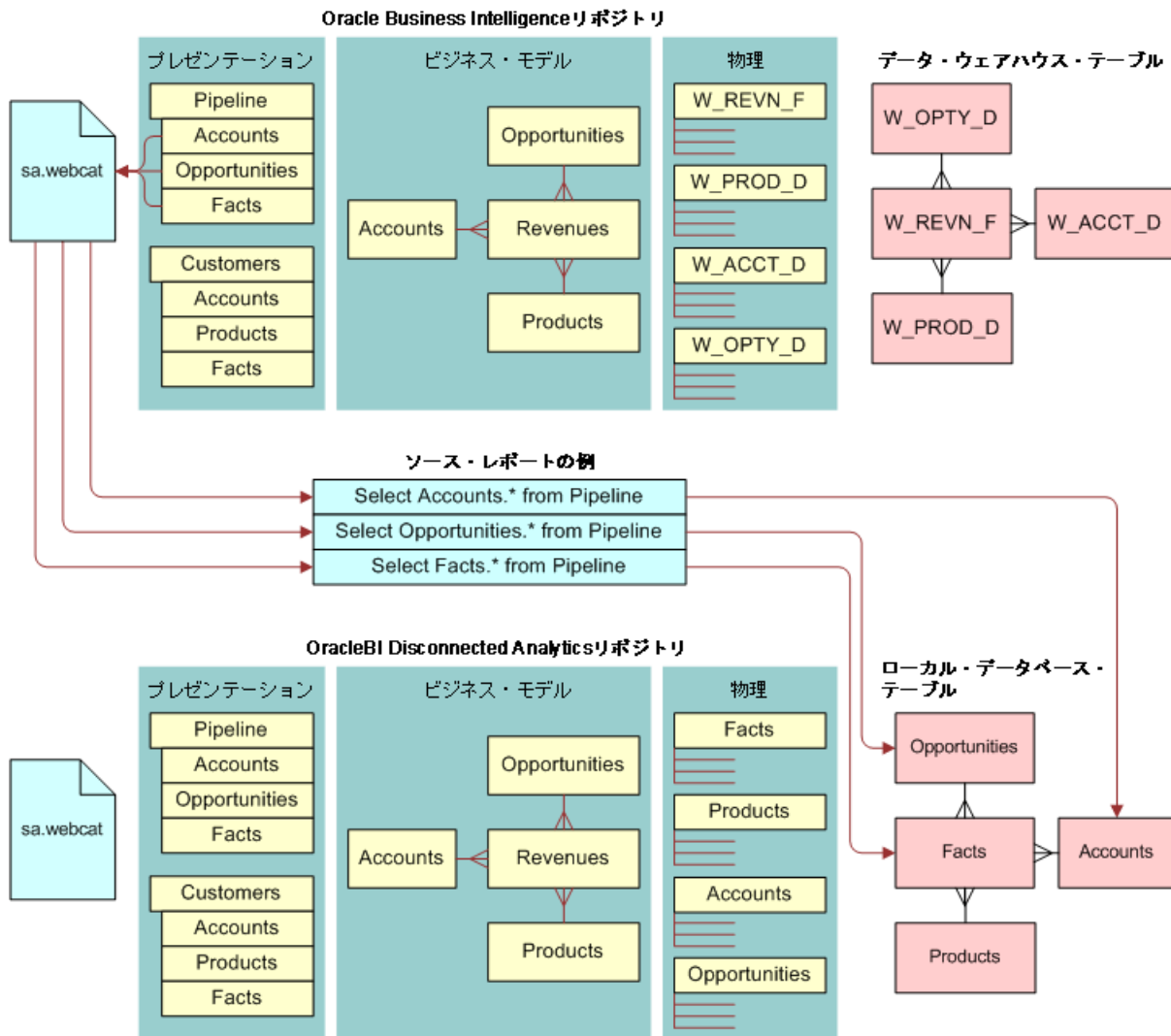


図 4. Oracle BI Disconnected Analytics のソース・クエリーによる切断されたテーブルへの移入

各ソース・クエリーには、SQL Anywhere データベース内に対応するテーブルがあります。ソース・クエリーにおける列の数、型および順序は、対応する SQL Anywhere データベース・テーブルにおける列の数、型および順序に完全に一致する必要があります。たとえば、「[手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト](#)」(24 ページ) で説明した簡単な小売りデータベースにおいて Store テーブルに次の列がある場合は、このテーブルに対応するソース・クエリーにも、この 4 つの列をまったく同じ順序で含める必要があります。

- Integer identifier
- Thirty-character name
- Twenty-character city location
- Two-character state abbreviation

**注意:** ソース・クエリーには、グローバル・フィルタ（すべての切断されたユーザーに適用されるフィルタ）を追加することができます。また、切断されたユーザーは、特定の列に対して独自のフィルタ・パラメータを選択できます。ユーザーに独自のフィルタの選択を許可するには、アプリケーションの構成時に、対応する列を追加する必要があります。詳細は、「[手順 6: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルの作成](#)」(32 ページ) の <filterables> 要素と <formula> 要素の説明を参照してください。

ソース・クエリーを作成したら、Oracle Business Intelligence から実行してテストします。詳細は、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

## 手順 6: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルの作成

Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションの構成ファイルにより、切断されたアプリケーションを定義に必要な情報を用意します。これによって、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager と Oracle Business Intelligence が連携してアプリケーションをダウンロードできるようになります。この構成ファイルに、Oracle BI Disconnected Analytics の使用に必要なすべての要素が記述されます。

構成ファイルは、XML 要素と要素固有の属性によって構成されます。切断された構成ファイルを作成してメンテナンスするには、XML の基本的な概念を理解している必要があります。

切断されたアプリケーションの構成ファイルを作成するときは、次のガイドラインに従ってください。

- 構成ファイルのベース名は、切断されたアプリケーションの名前と完全に一致する必要があります。また、ファイルの接尾辞は XML にする必要があります。「[手順 2: SQL Anywhere データベースのテーブルと索引の作成とテスト](#)」(24 ページ) の簡単な小売りビジネス・アプリケーションの例では、切断されたアプリケーションの構成ファイルの名前は retail.xml となります。
- 構成ファイルには ASCII 文字でない文字を含めることができます。ASCII 文字でない文字が含まれるファイルは、UTF-8 フォーマットで保存する必要があります。他のフォーマットで保存した場合は、ファイルの読み取り時に解析エラーが発生します。
- ファイルは、切断されたアプリケーションのディレクトリに格納する必要があります。前述の簡単な小売りビジネス・アプリケーションの例では、ディレクトリは D:\Oracle\BIData\Disconnected\Retail になります。切断されたディレクトリの詳細は、「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) を参照してください。
- その他の説明は、次を参照してください。
  - 構成ファイルにおけるデータセット作成方法の詳細は、「[データセット定義の操作](#)」(33 ページ) を参照してください。
  - サンプル構成ファイルの詳細は、「[アプリケーション構成ファイルの例](#)」(39 ページ) を参照してください。
  - 切断されたアプリケーションの構成ファイルに記述される XML 要素（および各要素の属性）の詳細は、[付録 A 「構成ファイル・リファレンス」](#) を参照してください。

**注意:** Oracle BI Disconnected Analytics を購入して Pharma アプリケーションと併用する場合は、アプリケーション構成ファイルは事前構成されます。



## データセット定義の操作

「アプリケーション構成ファイルの例」(39 ページ) で記載された簡単な小売りビジネス・アプリケーションに対応するサンプル XML 構成ファイルは、3 つのテーブルがある 1 つのデータセットから構成される単純な構成ファイルです。1 つのテーブルの 1 つのデータセットのみで十分な場合もありますが、複雑なアプリケーションでは、複数のデータセットの使用が必要になる場合もあります。

この項では、切断されたアプリケーションに複数のデータセットを定義する理由と、1 つのテーブルにのみ 1 つのデータセットを定義する理由についてそれぞれ説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [複数のデータセットの定義 \(33 ページ\)](#)
- [複数のテーブルからの結合テーブルの生成 \(37 ページ\)](#)

## 複数のデータセットの定義

この項では、次のタイプの顧客サービスを追跡管理する顧客インタラクション対応アプリケーションの例を使用して、複数のデータセットについて説明します。

- 顧客からのサービス・リクエスト：サービス・リクエストには、所有者、ステータスおよび依頼日時があります。
- 顧客参加型の活動（電話対応、オンサイト出張サービス、製品デモなど）：活動には、優先順位、タイプおよび予定日時があります。

34 ページの図 5 に、このアプリケーションのデータベース・スキーマを示します。この図は、2 つのメイン・ファクト・テーブル（Activity と SR）とそれらに関連付けられたディメンション・テーブルのあるスキーマを示しています。2 つのファクト・テーブルでは、Customer と Time のディメンション・テーブルが共有されます。

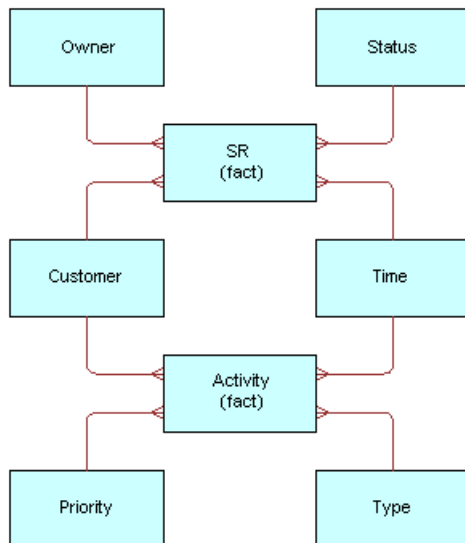


図 5. 複数のデータセットがあるアプリケーションのデータベース・スキーマ

**警告:** Oracle BI 管理者は、データの一貫性と整合性を検証する必要があります。たとえば、新しいディメンション・レコードが含まれる新しいデータセットを作成した場合、対応するファクト・データセットを更新しないと、切断されたデータベースで適切な結果が生成されない場合があります。

## 静的ディメンション

静的ディメンションは、長期にわたって変更されないかまったく変更されないディメンション・テーブルです。たとえば、郵便番号のディメンション・テーブルは、ほとんどのアプリケーションにとって静的ディメンションとなります。静的ディメンションは変更頻度が少ないため、切断されたユーザーは通常一度ダウンロードするだけです。したがって、切断されたアプリケーションのすべての静的ディメンション・テーブルを、個別のデータセットに定義します。

「複数のデータセットの定義」(33 ページ)における顧客インタラクション対応アプリケーションの例には、1つの静的ディメンション (Time) があります。データベース管理者は通常、数年分の時間データを事前に割り当てます。そのため、そのテーブルは数年間は変更が不要です。たとえば、顧客インタラクション対応アプリケーションでは、Time ディメンションには 2010 年までの静的データが割り当てられています。

## Time ディメンションのデータセットの例

Time ディメンションのデータセット定義の例を次に示します。

```

<dataset      name="Static"
              incremental="true"
              syncmode="preprocessed"
              forcesync="true"
              subjectarea="CustomerInteraction">
  <displayname lang="en" value="Data Set for Static Dimensions"/>

```

```

<displayname lang="es" value="Colección de Datos para Dimensiones Constante"/>
<table name="Time">
  <sourcingreport name="Time" file="Time.csv"/>
  <tablesql name="Time.sql"/>
</table>
</dataset>

```

**注意：**ダウンロードはデフォルトで、切断されたマシン上での最初の同期化時にのみ実行されます。ユーザーはこの属性を無視する設定（forcesync = "true"）を行うことはできません。

## 共通ディメンション

共通ディメンションは、複数のファクト・テーブルで結合されたディメンション・テーブルです。共通ディメンションは複数のファクト・テーブルで結合されているため、必ず同期化されている必要があります。したがって、切断されたアプリケーションのすべての共通ディメンション・テーブルを個別のデータセットに格納します。

「複数のデータセットの定義」（33 ページ）における顧客インタラクション対応アプリケーションの例では、2つの共通ディメンション（Customer と Time）があります。Time ディメンションは静的ディメンションとして編成済のため、Customer テーブルのみを共通ディメンションとしてデータセットに格納します。

### 共通ディメンションのデータセットの例

Customer 共通ディメンションのデータセット定義の例を次に示します。

```

<dataset name="Common"
  incremental="true"
  syncmode="preprocessed"
  forcesync="true"
  subjectarea="CustomerInteraction">
  <displayname lang="en" value="Data Set for Common Dimensions"/>
  <displayname lang="es" value="Colección de Datos para Dimensiones Comunes"/>
  <table name="Customer">
    <sourcingreport name="Customer" file="Customer.csv"/>
    <tablesql name="Customer.sql"/>
  </table>
</dataset>

```

ダウンロードはデフォルトで、切断されたマシン上での最初の同期化時とそれ以降のすべての同期化時に実行されます。ユーザーはこの属性を無視する設定（forcesync = "true"）を行うことはできません。

## ファクト・テーブルとプライベート・ディメンション

プライベート・ディメンションは、1つのファクト・テーブルにのみ結合されるディメンションです。通常、ファクト・テーブルは相互に関係なく変更されるため、各ファクト・テーブルとそれに関連付けられたプライベート・ディメンションを個別のデータセットに格納します。

顧客インタラクション対応アプリケーションの例では、2つのファクト・テーブル（Activity と SR）があるので、2つのファクト・テーブルとそれに関連付けられたプライベート・ディメンションでは個別のデータセットがあります。

### プライベート・ディメンションのあるファクト・テーブルのデータセットの例

ファクト・テーブルとそのプライベート・ディメンションのデータセット定義の例を次に示します。

```
<dataset    name="SR_Fact"
            incremental="true"
            syncmode="preprocessed"
            subjectarea="CustomerInteraction">
  <displayname lang="en" value="Service Request Data Set"/>
  <displayname lang="es" value="Colección de Datos de los Pedidos del
  Servicio"/>
  <table name="Owner">
    <sourcingreport name="Owner" file="Owner.csv"/>
    <tablesql name="Owner.sql"/>
  </table>
  <table name="Status">
    <sourcingreport name="Status" file="Status.csv"/>
    <tablesql name="Status.sql"/>
  </table>
  <table name="SR_Fact">
    <sourcingreport name="SR_Fact" file="SR_Fact.csv"/>
    <tablesql name="SR_Fact.sql"/>
  </table>
</dataset>
<dataset    name="Activity_Fact"
            incremental="true"
            syncmode="preprocessed"
            subjectarea="CustomerInteraction">
  <displayname lang="en" value="Activity Data Set"/>
  <displayname lang="es" value="Colección de Datos de la Actividad"/>
  <table name="Priority">
    <sourcingreport name="Priority" file="Priority.csv"/>
    <tablesql name="Priority.sql"/>
  </table>
  <table name="Type">
    <sourcingreport name="Type" file="Type.csv"/>
    <tablesql name="Type.sql"/>
  </table>
</dataset>
```

```

</table>
<table name="Activity_Fact">
  <sourcingreport name="Activity_Fact" file="Activity_Fact.csv"/>
  <tablesql name="Activity_Fact.sql"/>
</table>
</dataset>

```

## 複数のテーブルからの結合テーブルの生成

1 つのファクト・テーブルをそのすべてのディメンション・テーブルに結合することにより、単一の結合テーブルを生成できます。

単一テーブルの手法によりデータセット定義が単純になり、管理する SQL スクリプトの数が少なくなります。また、SQL Anywhere データベースで結合テーブルに対してさらに結合操作を行う必要がないため、切断されたマシンのパフォーマンスが向上する場合があります。ただし、テーブルを結合すると、ディメンション・テーブルの列値がファクト・テーブルのエントリごとに繰り返されるためデータ量が増大します。

**警告：**大きなファクト・テーブルと多数のディメンション・テーブルのあるアプリケーションでは、単一テーブルの手法を選択しないでください。単一テーブルの手法は、結合テーブルのサイズが 20MB 未満になる場合のみ選択してください。

たとえば、「[アプリケーション構成ファイルの例](#)」(39 ページ) の簡単な小売りビジネス・アプリケーションの例では、Product と Store のディメンションを SalesFact テーブルに結合し単一テーブルを生成できます。

## 複数テーブルから結合テーブルを生成する方法の例

次のファイル（ファイル名は CombinedRetail.sql）は、結合テーブルを生成する SQL 文の例です。

```

drop table CombinedRetail;

create table CombinedRetail (
  C_ProductctID      integer,
  C_StoreID          integer,
  C_ProductName      char(30),
  C_StoreName        char(30),
  C_City              char(20),
  C_State             char(2),
  C_Timestamp         datetime,
  C_Quantity          smallint,
  C_Price             smallint
);

```

## 単純化された小売りデータセットの例

テーブル結合後に単純化された小売りデータセットの例を次に示します。

```
<dataset    name="SimpleRetail"
            incremental="true"
            syncmode="preprocessed"
            subjectarea="SimpleRetail">
  <displayname lang="en" value="Simplified Retail Data Set"/>
  <displayname lang="es" value="Colección Simplificada de Datos al Por Menor"/>
  <table name="CombinedRetail">
    <sourcingreport name="CombinedRetail" file="CombinedRetail.csv"/>
    <tablesql name="CombinedRetail.sql"/>
  </table>
</dataset>
```

## アプリケーション構成ファイルの例

この項では、アプリケーション構成ファイルの例について説明します。

- [retail.xml 構成ファイルの構造 \(39 ページ\)](#)
- [retail.xml 構成ファイルの要素と属性の説明 \(40 ページ\)](#)

### retail.xml 構成ファイルの構造

ここでは、XML フォーマットのアプリケーション構成ファイルを作成するときに役立つ例を紹介します。ここで紹介する例の retail.xml ファイルは、頻繁に使用される要素と属性を説明する目的で記述されています。各要素と属性は、retail.xml ファイルの例に続く表に、ファイルの出現順で説明されています。[40 ページの表 3](#)に、この例の要素と属性の説明を示します。

```
<remotecfg>
  <application name="Retail"
    displayname="Retail Database Application"
    dir="app">
    <repository name="Retail.rpd"/>
    <webcatalog name="Retail.catalog"/>
    <displayname lang="en" value="Retail Database Application"/>
    <displayname lang="es" value="La Aplicación de la Base de datos al Por Menor"/>
  </application>
  <data dir="data" catalogfolder="/shared/Disconnected/Retail">
    <dataset name="Retail"
      incremental="true"
      syncmode="online"
      subjectarea="Retail">
      <displayname lang="en" value="Retail Data Set"/>
      <displayname lang="es" value="La Colección de Datos al Por Menor"/>
      <table name="Product">
        <sourcingreport name="Product" file="Product.csv"/>
        <tablesql name="Product.sql"/>
        <indexsql name="ProductIdx.sql"/>
      </table>
      <table name="Store">
        <sourcingreport name="Store" file="Store.csv"/>
        <tablesql name="Store.sql"/>
      </table>
      <table name="SalesFact">
        <sourcingreport name="SalesFact" file="SalesFact.csv"/>
        <tablesql name="SalesFact.sql"/>
      </table>
    </dataset>
  </data>
</remotecfg>
```

## retail.xml 構成ファイルの要素と属性の説明

表 3 には、retail.xml ファイルの各要素と属性の説明が記載されています。要素と属性は、サンプル・ファイルに出現する順序で記載されています。すべての要素と属性は小文字で表記される必要があります。構成ファイルに使用可能な XML 要素の詳細は、付録 A「構成ファイル・リファレンス」を参照してください。

表 3. retail.xml 構成ファイルの要素と属性の説明

< 要素 > または属性	説明
<remotecfg>	構成ファイル全体を囲みます。切断されたアプリケーションの構成ファイルであることを示します。
<application>	この要素は、切断されたアプリケーションを識別します。<application> 要素には、<repository> や <webcatalog> などの子要素を含めることができます。また、<application> 要素は、複数の <displayname> 子要素を持つことができます。詳細は、この表の <displayname> 子要素の説明を参照してください。また、「切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリ」(23 ページ) も参照してください。
name	<application> 要素の属性で、アプリケーションの内部名を識別します。この内部名は、切断されたアプリケーションのディレクトリと同じになります (この例では、Retail)。切断されたアプリケーションの構成ファイル (この例では、retail.xml) はこのディレクトリにあります。
displayname	<application> 要素の属性で、アプリケーションのデフォルトの説明名を識別します。この名前は、Oracle Business Intelligence の「Disconnected」ページと Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager に表示されます。
dir	<application> 要素の属性で、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリを識別します。
<repository> (<application> 要素の子要素)	<application> 要素の子要素です。この子要素は、同期化時に、切断マシンにダウンロードされる切断されたアプリケーション・リポジトリを識別します。
<webcatalog> (<application> 要素の子要素)	<application> 要素の子要素です。この子要素は、同期化時に、切断マシンにダウンロードされるローカルの Oracle BI Presentation Catalog を識別します。
<displayname> (<application> 要素の子要素)	<application> 要素は複数の <displayname> 子要素を持つことができます。また、それぞれの子要素により特定の言語におけるアプリケーションの説明名を識別します。この説明名は、Oracle Business Intelligence の「Disconnected」ページと Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager に表示されます。



表 3. retail.xml 構成ファイルの要素と属性の説明

< 要素 > または属性	説明
lang (および) value	<p>&lt;displayname&gt; 子要素では、lang 属性により言語を識別し、value 属性により説明名を識別します。ユーザーは Oracle Business Intelligence にログインするときに、言語の選択を指定します。</p> <p>たとえば、小売りビジネス・アプリケーションの例では、English を選択すると、表示名は Retail Database Application となります。Spanish を選択した場合は、La Aplicación de la Base de datos al Por Menor となります。その他の言語が選択された場合は、&lt;application&gt; 要素の displayname 属性で指定されたデフォルト表示名が表示されます。</p>
<data>	同期化の一部として切断マシンにダウンロードされるすべてのデータを識別します。詳細は、「 <a href="#">切断されたアプリケーションのデータ・ディレクトリ</a> 」(23 ページ)を参照してください。
dir	<data> 要素の属性で、切断されたアプリケーションのデータ・ディレクトリを識別します。
catalogfolder	<p>&lt;data&gt; 要素の属性で、アプリケーション用ソース・クエリーが格納された完全な Oracle BI Presentation Catalog のフォルダへのフルパスを識別します。この例では、小売りビジネス・アプリケーション例にあるすべてのソース・クエリーが、次の Web カタログ・フォルダにあります。</p> <p style="text-align: center;">/shared/Disconnected/Retail</p>
<dataset>	この要素は、同期化の単位を識別します。dataset に指定されたテーブルはすべて、切断されたマシンに分割不可のパッケージとして送信されます。
name	<dataset> 要素の属性で、データセットの内部名を識別します。
incremental	<dataset> 要素の属性で、データセットに増分のみの同期化を使用するかどうかを指定します。
syncmode	<dataset> 要素の属性で、同期化を事前処理スクリプトまたはオンラインのどちらで実行するかを指定します。
subjectarea	<dataset> 要素の属性で、切断されたアプリケーションが関連付けられている、Oracle BI Server のリポジトリ内のサブジェクト領域名を識別します。Oracle Business Intelligence では、完全な Oracle BI Presentation Catalog にアプリケーションのフィルタを格納するときにこの名前を使用します。
<displayname> (<dataset> 要素の子要素)	<p>この子要素は、指定された言語でのデータセットの説明名を識別します。</p> <p>&lt;dataset&gt; 要素は、複数の &lt;displayname&gt; 子要素を持つことができ、それぞれの子要素は特定の言語におけるデータセットの説明名を識別します。この説明名は、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager の拡張領域と、Oracle BI Server 上の Oracle Business Intelligence の「Disconnected Filter」ページに表示されます。&lt;displayname&gt; 要素に指定されていない言語が選択された場合は、データセットの内部名が表示されます(この例では、Retail)。</p>

表 3. retail.xml 構成ファイルの要素と属性の説明

< 要素 > または属性	説明
<table>	<p>データセットの一部として、切断されたマシンに作成される SQL テーブルを識別します。小売りビジネス・アプリケーションの例では、2つのディメンション・テーブルと1つのファクト・テーブルが作成されます。各テーブルは個々の&lt;table&gt;要素で識別され、各&lt;table&gt;要素に&lt;sourcingreport&gt;、&lt;tablesqli&gt;、&lt;indexsql&gt;などの子要素を含めることができます。</p> <p><b>注意：</b> Product テーブルの&lt;table&gt;要素には、同じく Product という名前のソース・クエリー（レポート）があります。このクエリーの出力は、Product.csv という名前のファイルに格納されます。同期化時に、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager によって、Product.sql スクリプト・ファイルを使用して Product テーブルが切断されたマシンに作成され、ProductIdx.sql スクリプト・ファイルを使用して関連するすべての索引が作成されます。テーブルとその索引の作成後、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager では Product.csv ファイルからテーブルにデータが移入されます。</p>
<sourcingreport> (<table> 要素の子要素)	この子要素により、テーブル・データの作成に使用するソース・クエリーを識別します。
<tablesqli> (<table> 要素の子要素)	この子要素により、切断されたマシン上での SQL テーブルの作成に使用するスクリプト・ファイルを識別します。
<indexsql> (<table> 要素の子要素)	この子要素により、テーブルに対する1つ以上の索引の作成に使用するスクリプト・ファイルを識別します。

## Oracle BI Server からのアプリケーションの削除

切断されたアプリケーションをダウンロード不可にする場合は、Oracle BI Server からそのアプリケーションを削除します。

**注意：** 切断されたアプリケーションをラップトップから削除する方法の詳細は、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics のオンライン・ヘルプを参照してください。

### 切断されたアプリケーションを削除するには

- 1 Oracle BI Server マシンで、アプリケーション・ディレクトリとファイルを \$OracleBIData\_HOME¥Disconnected¥ ディレクトリから削除します。ここで \$OracleBIData\_HOME は、データ・ディレクトリを示します。
- 2 Oracle BI Interactive Dashboards にログインし、Answers にナビゲートします。
- 3 Answers で、ソース・クエリーを Oracle BI Presentation Catalog から削除します。

# 5

## Oracle BI Disconnected Analytics へのアプリケーションのデプロイ

第3章「Oracle BI Disconnected Analytics の設定」で説明されている作業が完了したら、アプリケーションの各コンポーネントとデプロイメント・プロセスをテストする必要があります。テストが完了したら、ユーザーが Oracle BI Disconnected Analytics をインストールしてアプリケーションをダウンロードする作業を支援できます。

この章の内容は次のとおりです。

- 手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストールの作成とテスト (44 ページ)
- 手順 2: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションのテスト (45 ページ)
- 手順 3: アプリケーションのダウンロードのテスト (45 ページ)
- 手順 4: 切断されたマシンの設定 (46 ページ)

## 手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストールの作成とテスト

各ユーザーのマシンに Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストール用ファイルを作成するか、ユーザーがインストール・ウィザードを自分で実行できるようにするか選択できます。サイレント・インストールを作成するには、切断されたユーザーが行う場合と同じインストールを実行し、そのすべてのレスポンスを BAT（レスポンス）ファイルに記録します。この BAT ファイルをサイレント・インストールの実行に使用することで、ユーザーは共有ネットワーク・ドライブにマップして CD イメージにアクセスし、レスポンス・ファイルをコマンドラインから実行できます。レスポンス・ファイルには、サイレント・インストールが実行中であることを切断されたユーザーに知らせるメッセージを追加できます。Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager は、Oracle BI Disconnected Analytics が各切断マシンにインストールされるときにインストールされます。

サイレント・インストールでは再起動は強制されません。ほとんどの場合、再起動は不要です。ただし、国際版の Windows 2000 オペレーティング・システムでは、多くの場合で再起動が必要になります。

### Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストール用レスポンス・ファイルを作成してテストするには

- 1 次のコマンドラインを入力して、レスポンス・ファイルを生成します。

```
setup.exe -options-record [complete path, including response file name, to shared directory]
```

- 2 「Complete」インストールを実行して、指定したファイルにすべてのレスポンスを記録します。

インストール・ディレクトリは、切断されたユーザーがファイルのインストール先として選択するディレクトリと同じにする必要があります。

- 3 サイレント・インストール用の通知メッセージを作成する場合は、次の行を BAT ファイルに追加します。

```
@ECHO OFF
```

```
CLS
```

```
echo Oracle BI Analytics Disconnected Client is being installed.Please wait...
```

```
setup.exe -options [complete path to response file] -silent
```

```
echo Oracle BI Business Analytics Disconnected Client was successfully installed.
```

- 4 ほとんどの切断ユーザーが使用するマシンと同様のマシンでレスポンス・ファイルをテストし、インストールが成功することを確認します。

インストールの詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

## 手順 2: Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションのテスト

切断されたユーザーにアプリケーションをデプロイする前に、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager を使用せずに、切断されたアプリケーションをダウンロードして実行することで、各アプリケーションをテストします（テスト・データの使用は任意）。この方法でテストすることで、デプロイ前に、切断されたりポジトリ、ローカルの Oracle BI Presentation Catalog、およびデータベース・テーブルが検証されます。データベース・テーブルを個別に設定しない場合は、アプリケーションを切断されたユーザーとしてテストできます。

### Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションをテストするには

- 1 テストを行うマシンを決めます。
- 2 Oracle BI Server コンポーネントをテスト・マシンにインストールします。  
インストールの詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。
- 3 Oracle BI Server マシン上のリポジトリと Oracle BI Presentation Catalog のかわりに、切断されたりポジトリとローカルの Oracle BI Presentation Catalog をテスト・マシンで使用します。
- 4 テスト用の切断されたデータベースをポイントするようデータベース接続を設定します。  
手動でテスト・データをロードすると、ローカル Oracle BI Presentation Catalog を検証できます。
- 5 Oracle BI Server と Oracle Business Intelligence のサービスを起動します。
- 6 各アプリケーションにログインし、クエリーを実行します。
- 7 エラーが発生したらデバッグします。

## 手順 3: アプリケーションのダウンロードのテスト

管理者および切断されたユーザーは、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager を使用して、切断されたアプリケーションを Oracle BI Server からダウンロードできます。この項では、一般的な手順について説明します。詳細は、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics のオンライン・ヘルプを参照してください。

**注意：**現時点では、ダウンロードと同期化は片方向のみのプロセスです。データは Oracle BI Server データベースからダウンロードできますが、ラップトップ上の切断されたりポジトリから Oracle BI Server データベースへデータをアップロードすることはできません。

### 切断されたアプリケーションのダウンロードをテストするには

- 1 テストを行うマシンを決めます。
- 2 「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストールの作成とテスト](#)」で作成したレスポンス・ファイルまたはインストール・ウィザードを使用して、Oracle BI Disconnected Analytics をテスト・マシンにインストールします。

- 3 Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager」を選択して、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager を起動します。
- 4 Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager で、「Get Server Info」をクリックし、アプリケーションのダウンロードを開始します。

#### 切断されたデータベースへのデータのダウンロードをテストするには

- 1 アプリケーションをダウンロードしたマシンから、ネットワーク上の Oracle BI Interactive Dashboards を開き、「More Products」リンク→「Disconnected Analytics」リンクをクリックします。  
デプロイ済の切断されたアプリケーションが表示されます。
- 2 「Update Data」をクリックします。
- 3 「File Download」ダイアログ・ボックスで、「Open」をクリックします。
- 4 Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager を使用して、アプリケーションとデータをダウンロードできます。

**注意:** Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager では、切断されたデータベースにデータがバブルク・ロードされます。データの重複はチェックされず、すべてのデータが追加されます。データの整合性を検証する必要があります。

#### アプリケーション・データを切断されたマシンでテストするには

- 1 アプリケーションを起動し、クエリーを実行します。  
詳細は、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics のオンライン・ヘルプを参照してください。
- 2 エラーが発生したらデバッグします。

## 手順 4: 切断されたマシンの設定

デプロイ・プロセスをテストしたら、Oracle BI Disconnected Analytics のユーザー用にマシンを設定します。マシンを設定するには、次の各手順を実行します。

- ユーザーのマシンへの Oracle BI Disconnected Analytics のインストール
- ユーザーのマシンへのアプリケーションのダウンロード
- サイレント・モードで動作するためのユーザーのマシンの設定

## ユーザーのマシンへの Oracle BI Disconnected Analytics のインストール

管理者は、次の 2 種類の方法のいずれかによって、ユーザーによる Oracle BI Disconnected Analytics のインストールを支援できます。

- ネットワーク・ドライブを一時的に CD イメージのある共有パスにマッピングし、ウィザードを起動する方法：これによってユーザーは、Oracle Business Intelligence インストール・ウィザードからインストールできます。
  - 「手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のサイレント・インストールの作成とテスト」で作成したレスポンス・ファイルを実行する方法：このレスポンス・ファイルの実行に関する情報をユーザーに対して用意します。これによってユーザーは、ネットワーク・ドライブを一時的に CD イメージとレスポンス・ファイルのある共有パスにマッピングできます。ユーザーはコマンド・ウィンドウから BAT ファイルを実行します。
- 注意：** 通知メッセージを切断されたユーザーに用意しないかぎり、インストールは完全にサイレントに行われます。

## ユーザーのマシンへのアプリケーションのダウンロード

ユーザーが Oracle BI Disconnected Analytics をインストールしたら、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager を使用して適切なアプリケーションをダウンロードするための情報をユーザーに対して用意します。ダウンロードするアプリケーションの名前を連絡し、Oracle Business Intelligence Disconnected Analytics のオンライン・ヘルプの参照先を示します。

## サイレント・モードで動作するためのユーザーのマシンの設定

管理者のセキュリティ権限を持つユーザーは、Oracle BI Disconnected Analytics をサイレント・モードで実行できます。また、管理者やユーザーが切断されたマシンの起動や再起動を行うときに Oracle BI Disconnected Analytics が自動で起動されるよう設定できます。タスクバーの右下にあるシステム・トレイに Oracle Business Intelligence アイコンが表示されているときは、Oracle BI Disconnected Analytics が動作中です。Oracle BI Disconnected Analytics のバックグラウンド（サイレント・モード）での実行方法を次に説明します。

- **サイレント・モードでの自動起動：**切断されたマシンが自動的にサイレント・モードで動作するよう設定するには、切断されたマシンの「スタートアップ」フォルダに次のコマンドを追加します。

```
sadis.exe /s
```

切断されたマシンの起動時に、Oracle BI Disconnected Analytics がロードされ、クエリーが実行可能になります。コマンドを「スタートアップ」フォルダに追加する方法の詳細は、Microsoft Windows のドキュメントを参照してください。

- **サイレント・モードでの手動起動：**コマンドライン・ウィンドウを開き、次のコマンドを入力します。

```
sadis.exe /s
```





# 6

## Oracle BI Disconnected Analytics でのアプリケーションの同期化

この章の内容は次のとおりです。

- [同期について](#) (50 ページ)
- [同期の設定](#) (50 ページ)

## 同期について

同期とは、Oracle BI Server から各ユーザーの切断されたマシンに、データをダウンロードする仕組みです。同期の最初の発生時には、すべての履歴データがダウンロードされます。最初の同期の後には、増分同期機能により、増分データのダウンロードが可能となります。

ユーザーがアプリケーションを初めて同期化するには、ユーザー名とパスワードの作成が求められることがあります。このプロンプトは、synconfig.xml ファイルの SetDBUser 要素で制御します。これは、デフォルトで YES に設定されています。ユーザーがユーザー名とパスワードを入力したら、この値は NO に変更されます。その結果、ユーザー名とパスワードの入力がその後の同期で不要になります。

現時点では、同期によって切断されたマシンへのデータのダウンロードのみが実行されます。切断されたマシンから Oracle BI Server へのデータのアップロードは実行できません。

ユーザーは、次のモードでデータをダウンロードできます。

- **オンライン・モード**：ユーザーは、データセット生成クエリーをリアルタイムに発行します。Oracle BI Server はデータを生成してから、そのデータをユーザーに戻します。このモードでは、ユーザーはローカル・マシンにデータセットが完全にダウンロードされるまで待機する必要があります。そのため、オンライン同期は特定の必要がある場合にのみ使用してください。
- **事前処理済モード**：ユーザーは、Oracle BI 管理者として、Oracle BI Server 上でデータセット生成をスケジュールします。これには、Delivers のインストールと設定が必要です。データセットはユーザーごとに生成され、新しいデータセットが生成されるまで保持されます。ユーザーがアプリケーションを同期化すると、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager によって、そのユーザーの事前処理済データセットが識別されてからダウンロードされます。したがって、同期にかかる時間は、この圧縮済データセットのダウンロード速度に依存します。

## 同期の設定

同期を設定するには、次の手順を実行します。

- [手順 1: 同期の構成ファイルの変更](#)
- [手順 2: Oracle BI Presentation Catalog からの更新アラートの無効化](#)
- [手順 3: バックグラウンド同期の設定 \(サイレント・モード\)](#)
- [手順 4: 事前処理済の同期の設定](#)
- [手順 5: 増分同期の設定](#)

### 手順 1: 同期の構成ファイルの変更

Oracle BI 管理者またはエンド・ユーザーは、同期プロセスに影響を及ぼす構成ファイルを編集できます。このファイルは synconfig.xml と呼ばれており、各ユーザー・マシンの \$OracleBIData\_HOME¥sync¥config¥ディレクトリに格納されます。ここで、\$OracleBIData\_HOME はデータ・ディレクトリを表します。

このファイルの各要素を説明します。

- **<Sync>**：このファイルのルート要素です。

- <ServerInstance>: このファイルと他の構成ファイルとの一貫性を保ちます。この要素は変更しないでください。
- <SADIS\_ExecuteMode>: アプリケーションが Oracle Siebel Customer Relationship Management と連携することを示します。これはプログラムによって設定されているため、Oracle BI 管理者もユーザーもこの設定を編集できません。
- <CurrentApplication>: 現在アクティブなアプリケーションの名前を識別します。切断されたマシンには、複数のアプリケーションをダウンロードできます。この設定は、現在アクティブなアプリケーションを追跡して、データとカタログが正常に更新されることを確認するために同期プロセスで保持されます。Oracle BI 管理者もユーザーもこの設定を編集できません。
- <SSOEnabled>: Web サーバーでのシングル・サインオンの使用が設定されている場合は、この設定をデフォルトの false から true に変更します。詳細は、「[Windows シングル・サインオンで使用するための Oracle BI Disconnected Analytics の設定](#)」(20 ページ) を参照してください。
- <SetDBUser>: ユーザーが Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager にアクセスする際に、「Create New User」ダイアログを表示するかどうかを指定します。Yes (デフォルト) の設定ではダイアログが表示され、No では表示されません。
- <ShowLogWhenDone>: サイレント同期中に「Progress」ダイアログを表示するかどうかを指定します。この設定が Yes の場合、ダイアログが表示されます。この設定が No (デフォルト) の場合は、同期が進行中であることがユーザーに通知されず、同期が成功したかどうかを判断するにはログ・ファイルの確認が必要です。
- <TimeOutValueSecs>: 切断されたクライアントから Oracle BI Server への接続をタイムアウトするまでの秒数を示します。デフォルト値は 300 です。ネットワーク通信量が多くて Oracle BI Server のレスポンスが遅いときは、この値を増やせます。
- <language>: 切断されたマシンへの Oracle BI Disconnected Analytics のインストール時に指定した言語を示します。この言語は、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager のダイアログで使用されます。デフォルト値は l\_en です。

syncnconfig.xml ファイルのサンプルを次に示します。

```
<!-- Oracle BI Sync Config file -->
<Sync>
  <ServerInstance>
    <CurrentApplication>Paint</CurrentApplication>
    <SSOEnabled>>false</SSOEnabled>
    <SetDBUser>No</SetDBUser>
    <ShowLogWhenDone>No</ShowLogWhenDone>
    <TimeOutValueSecs>5000</TimeOutValueSecs>
    <language>l_en</language>
  </ServerInstance>
</Sync>
```

## 手順 2: Oracle BI Presentation Catalog からの更新アラートの無効化

エンド・ユーザーがアプリケーションを同期化するとき、Oracle BI Server 上の Oracle BI Interactive Dashboards と同じアラートがローカル・ダッシュボードに表示されます。このローカル・アラートは、Oracle BI Interactive Dashboards にユーザーが長期間ログインしない際にローカル・カタログを最新の状態に保つために役立ちます。Oracle BI Disconnected Analytics では、この機能がデフォルトで有効になっています。

Oracle BI 管理者は、この機能をエンド・ユーザーに対して無効にすることを選択できます。そのためには、Oracle BI Server の instanceconfig.xml ファイルを開いてから、このファイルの最後にある <Disconnected> 要素を非コメント化します。<Disconnected> 要素内の <ArchiveAlerts> 要素で、設定を true から false に変更します。

instanceconfig.xml ファイルの詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

## 手順 3: バックグラウンド同期の設定（サイレント・モード）

ダッシュボードを Oracle Siebel Disconnected Web クライアントと統合するには、次の構文を使用して、Oracle BI Disconnected Analytics のバックグラウンド（サイレント・モード）での実行を設定する必要があります。

Sync	(必須)
-u U[User Name]	(必須)
-p P[Password]	(必須)
-f F[Dad File / URL Link]	DAD ファイル名。サーバー上の DAD ファイル名がわかる場合にのみ指定します。
-shttp://S[Server] または -shttps://S[Server]	マシン名。URL は、マシン名とアプリケーション名で構成されます。https の使用は、サーバーが Single Socket Layer (SSL) 接続のみを受け入れるように構成されていることを示します。
-a A[Application Name]	サーバーとともに使用する必要があります。
-r R	(オプション) プロセスがウィンドウを表示しないように構成されている場合でも、同期プロセスの完了後に、「Result Information」ウィンドウを表示します。この引数は、ウィンドウを表示しないように指定する構成を無効にします。
-h H	(オプション) Sync コマンドのヘルプ情報を表示します。
-l L[Log Filename]	(オプション)
-o O[Output Folder]	(オプション) 主にテスト用に使用します。

**警告：** パラメータとそれに対応する値との間にスペースを入力すると、「DAD ファイルが見つからない」というエラーが表示されるため、-a Pharma ではなく、-aPharma と入力してください。

## Oracle Siebel Pharma Disconnected の例

Oracle Siebel Pharma アプリケーションおよび Oracle Siebel Pharma Disconnected アプリケーションでは、コマンドライン・インタフェースが幅広く使用されているため、バッチ方式の同期を週末または夜間に行うことができます。医薬品の販売員は、通常、一度の同期プロセスで、複数の切断されたアプリケーション・データセットを同期化します。このプロセスでは、Siebel の業務系アプリケーション、Oracle Siebel Pharma Disconnected アプリケーション、Outlook など、すべてのアプリケーションに対して同期スクリプトが実行されます。

Oracle Siebel Pharma Disconnected アプリケーションを使用すると、CRM アプリケーションの同期を別個に行うことができます。CRM アプリケーションの同期の前には、Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションを停止してください。

Oracle Siebel Pharma Disconnected アプリケーションの同期は、通常、1 つのスクリプトに埋め込まれた一連のスクリプト・コマンドとして、バックグラウンドで実行されます。Oracle Siebel Pharma Disconnected ユーザーは、通常、同期化に Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager を使用しません。

Oracle Siebel Pharma Disconnected のコマンドライン同期の例を次に示します。

- サーバーとアプリケーション名を指定する場合は、コマンドラインに次のように入力します。

```
sync -uuser -ppassword -shttp://server -aPharma where server is <hostname>:<port>
```

**注意：**サーバーとアプリケーション名を指定する際に、コマンドラインでは、デフォルトで小文字が使用されます (Analytics の場合)。

- DAD ファイルの URL を指定する場合は、コマンドラインに次のように入力します。

```
sync -uuser -ppassword -f"http://server/Analytics/saw.dll?SyncDAD&app=Pharma"
```

## 手順 4: 事前処理済の同期の設定

この項では、事前処理済の同期に関する次の情報について説明します。

- [事前処理済の同期について](#)
- [アプリケーション構成ファイルの Syncmode の設定](#)
- [データセット・ファイルの格納](#)
- [Oracle BI Server の構成](#)

### 事前処理済の同期について

Oracle BI Disconnected Analytics では、Oracle BI 管理者は、ユーザーがデータを同期化する前にソース・クエリーを事前処理することにより、サーバーのロード・バランシングを実現できます。事前処理済の同期を設定する場合、切断されたアプリケーション用のソース・クエリーをオフピーク時に実行するようスケジュールします。

**注意：**アプリケーションは、事前処理済モードで同期化するように設定してください。これにより、通常の業務時間内のサーバー負荷が最低限に抑えられ、サーバーは切断されたデータセットをピーク使用時以外に作成するようになります。

事前処理済のデータセットは、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager に対して構成する必要がありません。通常、切断されたユーザーは、事前処理済のデータを受け取っていることを意識しません。事前処理済モードでは、ローカル・マシン上のデータセットが最新であるかどうか Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager によって判別されます。データセットの最新の同期日が、そのデータセット内のレポートの最終変更時間よりも前である場合、事前処理済モードのデータセットは古いとみなされます。

この項では、事前処理済アプリケーションを設定するためのガイドラインを示します。

**注意:** これらのガイドラインを実行する前に、Oracle BI Disconnected Analytics アプリケーションと Oracle Business Intelligence Scheduler の設定方法に精通している必要があります。Oracle Business Intelligence Scheduler の詳細は、『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』を参照してください。

## アプリケーション構成ファイルの Syncmode の設定

Syncmode はアプリケーション・ファイル内の属性で、データセットの事前処理済モードでの実行を可能にします。<dataset> 要素の Syncmode 属性が "preprocessed" に設定されている場合、切断されたユーザーが同期を開始すると、Oracle BI Server によってダウンロード対象の既存データ・ファイルが検索されます。ソース・クエリーは、事前処理済のファイルが存在しない場合にのみ実行されます。Syncmode の詳細は、[付録 A「構成ファイル・リファレンス」](#)を参照してください。

## データセット・ファイルの格納

このバージョンでは、データセットがより効率的に格納されます。以前のバージョンでは、異なるユーザーのデータセット間に共通性があるかどうかに関係なく、ユーザーごとに iBot セットが実行されていました。このバージョンでは、Oracle BI Presentation Services のクエリー・リクエスト・キー機能を使用しているため、2人以上のユーザーに対して同一のデータセットを生成するソース・クエリーが複数回実行されることはありません。クエリーは 1 回だけ実行され、複数のユーザーがそのデータセットにアクセスできます。

### リクエスト・キーの使用における構成ファイル要素

以前のバージョンのように、結果セットはアプリケーションのデータ・ディレクトリに格納します。それにより、ユーザーのログオン時に結果セットが使用可能になります。このバージョンでは、リクエスト・キーが Oracle BI Presentation Services のキャッシュで使用されているかどうかによって、結果セットの正確な格納場所は異なります。リクエスト・キーの使用は、Oracle BI Server の instanceconfig.xml ファイルにある、<Disconnected> 要素内の次の要素の影響を受けます。

- <UseRequestKey>: データの生成時に、Oracle BI Presentation Services のキャッシュでリクエスト・キーの使用を有効または無効にします。値は、true (デフォルト) または false のブール・キーワードです。
- <HashChars>: 事前処理済データのディレクトリの作成時に使用する文字を指定します。値は、デフォルトが 3 の整数です。この要素は、次のガイドラインに従って使用してください。
  - リクエスト・キーが有効でない場合、ユーザー名が類似しているときは、この設定によりディレクトリの名前付けが容易になります。たとえば、fred1 と fred2 という名前の 2 人のユーザーがいるとします。<HashChars> 要素の値を (fre に対応する) 3 に設定します。これにより、2 人のユーザーのデータは、fre/fred1/data.csv および fre/fred2/data.csv というファイルに格納されます。

- リクエスト・キーが有効である場合、この設定によりディレクトリおよびファイルの名前付けが容易になります。たとえば、<HashChars> 要素の値を 3 に設定し、リクエスト・キーの名前が abc123 であるとし、この場合、次の例に示すように、リクエスト・キーの名前の最初の 3 文字を使用するディレクトリにファイルが生成されます。

`OracleBIData¥Disconnected¥myapp¥data¥abc¥abc123.dat`

## リクエスト・キーの使用とディレクトリおよびファイルの名前付け

リクエスト・キーの使用がディレクトリおよびファイルの名前付けにどのように影響するかを次に示します。

- **リクエスト・キーが無効な場合**、次の条件を満たす名前のファイルにデータが生成されます。
  - データ生成時のタイムスタンプを使用して名前が付けられたディレクトリがあること。
  - データをリクエストしたユーザーの名前を使用して名前が付けられたサブ・ディレクトリがあること。
  - 次のような名前で作成された圧縮済ファイルがあること。
    - 切断されたアプリケーションの構成ファイル内で <sourcingreport> 要素の file 属性が指定されている場合、この属性値に接尾辞 .DAT を付加します。
    - file 属性が指定されていない場合、name 属性値に接尾辞 .DAT を付加します。

この名前のフォーマットは次のとおりです。

`OracleBIData¥Disconnected¥app-name¥data¥timestamp¥user-name¥filename.dat`

- **リクエスト・キーが有効な場合**、次の条件を満たす名前のファイルにデータが生成されます。
  - データ生成時のタイムスタンプを使用して名前が付けられたディレクトリがあること。
  - リクエスト・キー名に接尾辞 .dat を付加したファイル名であること。

この名前のフォーマットは次のとおりです。

`OracleBIData¥Disconnected¥app-name¥data¥timestamp¥filename.dat`

結果セットの格納場所の詳細は、「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) を参照してください。

## Oracle BI Server の構成

事前処理済のソース・クエリーの実行をスケジュールするには、この項のガイドラインに従ってください。iBot の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』の Delivers の使用の章を参照してください。

Delivers で新しい iBot を作成して定義するには、次のガイドラインに従ってください。

- 「Delivery Content」タブの「Select Content」をクリックして、ソース・クエリーが事前処理済モードで実行されるように指定します。

このコンテンツは、切断されたアプリケーションからのデータセットになります。ウィンドウの左側のツリーで、切断されたアプリケーションの 1 つを開き、データセットを選択します。
- 「Schedule」タブで、このクエリーのスケジュールを指定します。すぐに開始するよう選択した場合は、iBot が保存後すぐに実行されます。

- 「Recipients」タブで、このクエリーをどのユーザーのために実行するかを指定します。

**注意:** 受信者としてグループを設定した場合は、スケジュールされた時間にソース・クエリーが各ユーザーに対して 1 回実行されます。

- 「Destinations」タブの「Disconnected Application Cache」チェック・ボックスを選択し、それ以外のすべてのオプションのチェック・ボックスの選択を解除します。
- iBot を保存します。iBot は、Oracle BI Presentation Catalog の「My iBots」フォルダに保存されます。

## 手順 5: 増分同期の設定

この項では、増分同期に関する次の情報について説明します。

- [増分同期について](#)
- [増分データセットについて](#)
- [増分同期でのセッション変数またはフィルタの使用](#)

### 増分同期について

通常、切断されたユーザーが Oracle BI Server から最初にダウンロードするデータは、履歴データの完全ダウンロードです。切断されたユーザーは完全ダウンロードの後、データの更新を定期的にダウンロードします。これには、切断されたユーザーによる最新データの定期的なダウンロードが、Oracle BI Server で許可されている必要があります。

増分同期は、増分データ・ダウンロードを可能にします。それぞれの組織では異なる要件があるため、増分データはユーザー特性と組織のポリシーに応じて、様々な方法で設定する必要があります。増分同期では、次のものの制御できます。

- どのユーザーが増分データセットをダウンロードするか、またその頻度。
- 各データセットには何が含まれるか。
- 増分同期をオンライン・モードと事前処理済モードのどちらで行うか。

### 増分データセットについて

増分同期と完全ダウンロードの主な相違点は、データの整合性およびデータセットの妥当性の処理方法にあります。標準的な環境では、Oracle BI Disconnected Analytics の各アプリケーションには、少なくとも 1 つの完全データセットと、複数の増分データセットが含まれます。完全データセットは、他のどのデータセットにも依存しないデータセットです。完全データセットでは、テーブルの作成後にそのデータが初めてロードされます。増分データセットの場合は、その増分データセット内で指定された SQL スクリプトを使用して、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager がデータを追加します。この処理が正常に実行されるには、SQL スクリプトが正しく設定されている必要があります。

増分データセットは完全データセットと同様に、構成ファイル内でデータセットを定義することによって定義されます。アプリケーションは複数のデータセットを持つことができますが、各データセットは固有の構成ファイルを持ちます。増分データセットと完全データセットは、incremental 属性のみで区別されます。



異なるユーザーが別の日付にデータをダウンロードした場合、データは次の要因に基づいて異なります。

- 最終更新日: ユーザーが同期化を実行した最終日付
- 今日の日付: ユーザーの切断されたマシン上の日付

Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager では、複数のデータセットからのデータがテーブルにロードされる際に、データの整合性が自動的に管理されません。ロードされるデータによって複製が作成されないことを確認してください。

## 増分同期でのセッション変数またはフィルタの使用

このバージョンでは、増分同期の実行方法が拡張されています。以前のバージョンでは、増分同期は、アプリケーション構成ファイルの <dataset> 要素内にある数多くの属性に影響を受けてきました。これらの属性の使用は、サポートされなくなりました。

このバージョンでは、新たに incremental という単一属性と、2つのセッション変数 (LAST\_SYNC\_TIME と THIS\_SYNC\_TIME) が増分同期を制御します。次に示すように、last\_updated\_date などの名前で列を作成し、その列をユーザーに公開するかどうかを増分同期で設定できます。

- 「Presentation」レイヤー内のレポートに last\_updated\_date 列を公開する場合。Oracle BI Answers で、last\_updated\_date 列が、LAST\_SYNC\_TIME セッション変数値と THIS\_SYNC\_TIME セッション変数値との間であることを指定するフィルタを作成します。このフィルタをソース・レポートに追加します。
- ユーザーに last\_updated\_date 列を公開しない場合。Oracle BI Server の「Logical Table Source」ダイアログを使用して、last\_updated\_date 列を含むデータのファクト・テーブルに対して WHERE 句フィルタを作成します。

次に、「Logical Table Source」ダイアログの WHERE 句フィルタ・ボックスに入力可能なテキストの例を示します。ここでは、last\_updated\_date 列のフィルタ設定が指定されています。

```
server1_user1.User1.dbo.r_fact.last_updated_date BETWEEN
VALUEOF(NQ_SESSION."LAST_SYNC_TIME") AND VALUEOF(NQ_SESSION."THIS_SYNC_TIME")
```

セッション変数の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

## 増分同期スクリプトの例

Paint という切断されたアプリケーションがあるとします。Paint アプリケーション用の、切断されたアプリケーション構成ファイルのサンプルを次に示します。

```
<remotecfg>
  <application name="Paint" displayname="Paint Application" dir="app">
    <repository name="Paint.rpd"/>
    <webcatalog name="analytics.catalog"/>
  </application>
  <data dir="data" catalogfolder="/shared/disconnected">
```

```

<dataset name="my_incremental" incremental="true" subjectarea="Disconnected"
syncmode="preprocessed">
  <table name="R_DIM">
    <sourcingreport name="r_dim"/>
    <tablesql name="r_dim.sql"/>
  </table>
  <table name="R_FACT">
    <sourcingreport name="r_fact"/>
    <tablesql name="r_fact.sql"/>
  </table>
</dataset>
</data>
</remotecfg>

```

ファクト・テーブルとディメンション・テーブルのデータの増分同期を実行するには、次のサンプル・スクリプトを使用できます。「[SQL スクリプトを使用して切断されたテーブルと索引を作成する例](#)」(24 ページ) で説明されているとおり、これらのスクリプトは、完全ダウンロードで使用するスクリプトとほとんど同じであることに注意してください。これら増分同期のサンプル・スクリプトは、完全ダウンロード用のスクリプトとは次の点で異なります。

- 既存テーブルは削除されません。
- エラーは無視されます。CREATE TABLE コマンドは増分データを取り出すために発行しますが、テーブルはすでに存在しているため、テーブルが作成済であることを示す生成エラーを無視できると便利です。

### r\_dim.sql スクリプトのサンプル

[IGNORE\_ON\_ERROR]

```

CREATE TABLE R_DIM (
  customer_name varchar(50) NULL,
  city varchar(50) NULL);

```

### r\_fact.sql スクリプトのサンプル

[IGNORE\_ON\_ERROR]

```

CREATE TABLE R_FACT (
  customer_name varchar(50) NULL,
  amount float NULL);

```

# A

## 構成ファイル・リファレンス

この項では、Oracle BI Disconnected Analytics の構成ファイルの XML 要素とその属性を示します。XML 要素をアルファベット順に示すと同時に、各 XML 要素の属性について説明します。

**警告：**要素および属性では大文字と小文字が区別されますが、すべて小文字にする必要があります。

**注意：**構成ファイルが以前の製品バージョンを使用して作成されていて、増分同期の属性を使用している場合、それらの属性は現行バージョンでは動作しません。詳細は、「[手順 5: 増分同期の設定](#)」(56 ページ) を参照してください。

### ■ XML 要素：<application>

この要素は、切断されたアプリケーションを識別します。

**親要素：**<remotecfg>

**属性**

#### *name*

切断されたアプリケーションの内部名。これは、「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) で説明されている、切断されたアプリケーション・ディレクトリと同一の名前です。また、切断されたアプリケーションの構成ファイルのベース名と同一の名前です。たとえば、MyApp という切断されたアプリケーションは、MyApp ディレクトリに MyApp.xml という構成ファイルを持ちます。

名前は、数字とアルファベット文字のみで構成する必要があります。Oracle BI Server のオペレーティング・システムで許可されている、ディレクトリ名の最大長を指定できます。

タイプ：文字列

必須：はい

#### *dir*

「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) で説明されている、切断されたアプリケーションのメタデータ・ディレクトリ名。

タイプ：文字列

必須：いいえ。「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) で説明されている、切断されたアプリケーションのディレクトリがデフォルトになります。

### ■ XML 要素：<data>

**親要素：**<remotecfg>

**属性**

#### *dir*

「[手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握](#)」(22 ページ) で説明されている、切断されたアプリケーションのデータ・ディレクトリ名。

タイプ：文字列

必須：いいえ。「手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握」(22 ページ) で説明されている、切断されたアプリケーションのディレクトリがデフォルトになります。

### ***catalogfolder***

様々なソース・レポートを含む、完全な Oracle BI Presentation Catalog 内のフォルダのフルパス。構文的には、フォルダが完全な Oracle BI Presentation Catalog に実在し、切断されたアプリケーションの全エンド・ユーザーがそのフォルダへの読取り権限を付与されているかぎり、Oracle Business Intelligence が受け入れる設定はすべて有効です。

タイプ：文字列

必須：はい

## ■ XML 要素：<dataset>

親要素：<data>

### 属性

#### ***incremental***

このデータセットが増分同期を使用するかどうかを指定します。rank、validitytype、start、expiry、syncdefaultfirsttime、syncsubsequenttimes、period、periodunit、dependson などの廃止された属性を置き換えます。

タイプ：ブール・キーワードの true または false

必須：はい

#### ***name***

データセットを一意に識別する内部名。

タイプ：文字列

必須：はい

#### ***syncmode***

同期は、事前処理済またはオンラインのいずれかの方法で実行できます。オンライン・オプションでは、Oracle BI Server 上の Oracle Business Intelligence がソース・レポートを実行して、データセットのデータ・ファイルを同期化操作の一部として生成します。Oracle BI 管理者は通常、オンライン・オプションをリアルタイム・データ用に使用します。

事前処理済オプションでは、Oracle BI Server 上の Oracle Business Intelligence がダウンロード対象の既存データ・ファイルを検索し、そのような事前処理済のファイルが存在しない場合にのみソース・クエリーを実行します。

タイプ：有効なキーワード値の preprocessed または online

必須：いいえ

#### ***forcesync***

Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager の拡張モードにより、ユーザーは特定のデータセットをダウンロードしないように選択できます。forcesync 属性を使用すると、この選択を無視して Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager でダウンロードの実行を強制できます。Oracle BI 管理者は通常、この属性をシステム関連データと、時間ディメンションなどの一般的に使用されるディメンション・テーブルに使用します。

タイプ：ブール・キーワードの true または false (yes と no が今後サポートされる可能性がある)

必須：いいえ

### **subjectarea**

切断されたアプリケーションに関連付けられている、リポジトリ内のサブジェクト領域の名前。Oracle BI Server 上の Oracle Business Intelligence では、完全な Oracle BI Presentation Catalog にアプリケーションのフィルタを格納するときにこの名前を使用します。

タイプ：文字列

必須：はい

### ■ XML 要素：<displayname>

これは、指定された言語でのアプリケーションまたはデータセットの説明名を識別します。アプリケーションの説明名は、Oracle BI Server 上では Oracle Business Intelligence の「Disconnected Analytics」ページに、切断されたマシン上では Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager のアプリケーション・プルダウン・メニューに表示されます。すべてのデータセットの説明名は、Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager の「Advanced」セクション、および Oracle Business Intelligence の「Disconnected Analytics Filter」ページに表示されます。

アプリケーションまたはデータセットには、それぞれが異なる言語に対応する複数の <displayname> 要素が含まれることがあります。ユーザーは、Oracle Business Intelligence へのログイン時に、言語の選択を指定します。この選択に基づいて、対応する表示名が表示されます。

データセットに <displayname> 要素が含まれない場合（またはユーザーが指定した言語の <displayname> 要素が存在しない場合）、データセットの内部名が Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager の「Advanced」セクションに表示されます。

アプリケーションに <displayname> 要素が含まれない場合（またはユーザーが指定した言語に <displayname> 要素が存在しない場合）、アプリケーションのデフォルトの表示名がかわりに表示されません。

**注意：**アプリケーションでは、<displayname> 要素を <webcatalog> 要素と <postdbschema> 要素（指定されている場合）の後に置く必要がありますが、データセットでは、最初の <table> 要素よりも前に置く必要があります。

**親要素：**<application> または <dataset>

#### **属性**

#### **lang**

（表示名の言語を表すコード）。Oracle BI Disconnected Analytics では現在、次の言語とそれらに対応するコードがサポートされています。

□ チェコ語	"cs"
□ デンマーク語	"da"
□ ドイツ語	"de"
□ 英語	"en"
□ スペイン語	"es"
□ フィンランド語	"fi"
□ フランス語	"fr"
□ イタリア語	"it"
□ 日本語	"ja"
□ 韓国語	"ko"
□ オランダ語	"nl"
□ ポルトガル語	"pt"
□ ポルトガル語（ブラジル）	"pt-br"
□ スウェーデン語	"sv"
□ 中国語	"zh"
□ 繁体字中国語	"zh-tw"

タイプ：文字列（表示名の言語コード）

必須：はい

#### **value**

適切な言語での、表示名の実際のテキスト。

タイプ：文字列

必須：はい

#### ■ **XML 要素**：<filterables>

この要素をオプションとして使用すると、ソース・レポートから一連の列を列挙できます。エンド・ユーザーがフィルタ内で指定した内容に基づいて、切断されたマシン上のテーブルにどの行がダウンロードされるかが制限されます。

**親要素**：<sourcingreport>

**属性**：なし

■ **XML 要素** : <formula>

この要素は、ソース・レポートの特定の列をフィルタ内で使用可能なものとして識別します。たとえば、「SQL スクリプトを使用して切断されたテーブルと索引を作成する例」(24 ページ) で説明されている小売りデータベースでは、Store ソース・レポートに Store.Name (値は Downtown や West End)、Store.City (値は San Francisco や Seattle) などの列があります。これらの列をフィルタ処理で使用可能にするには、次の要素を指定します。

```
<sourcingreport name = "Store" file = "Store.csv">
<filterables>
<formula>Store.Name</formula>
<formula>Store.City</formula>
</filterables>
</sourcingreport>
```

エンド・ユーザーは、ソース・レポートにさらにフィルタを追加できます。たとえば、San Francisco と Seattle の Store レコードのみをダウンロードするフィルタを追加できます。

または、列名として \* を指定できます。これは、データセットで以前に指定したフィルタ処理可能なすべての列が、ソース・レポートに適用されることを示します。たとえば、SalesFact ソース・レポートに次のフィルタが指定されているとします。

```
<sourcingreport name = "SalesFact" file = "SalesFact.csv">
<filterables>
<formula>*</formula>
</filterables>
</sourcingreport>
```

これは、以前のソース・レポートでフィルタ処理可能であったすべての列 (この例では Store.Name および Store.City) が、SalesFact ソース・レポートにも適用されることを意味します。したがって、エンド・ユーザーが San Francisco と Seattle の Store レコードのみをダウンロードするフィルタを追加すると、それらのレコードとともに San Francisco と Seattle のファクト・テーブル・レコードのみがダウンロードされます。

\* オプションは、データセット内の最後のソース・レポートに対してのみ指定できます。

**親要素** : <filterables>

**属性** : なし

### ■ XML 要素 : <indexsql>

親要素 : <table>

#### 属性

##### *name*

切断されたマシンにダウンロードしたテーブル上に 1 つ以上の索引を作成するために Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager で使用される、SQL スクリプト・ファイルの名前。

タイプ : 文字列

必須 : はい

### ■ XML 要素 : <messages>

親要素 : <application>

#### 属性

##### *dir*

[「手順 1: Oracle BI Disconnected Analytics のディレクトリ構造の把握」\(22 ページ\)](#) で説明されている、切断されたアプリケーションのメッセージ・ディレクトリ名。このディレクトリには、切断されたアプリケーションのローカル・カタログ用のメッセージ・ローカライゼーション XML ファイルがあります。

タイプ : 文字列

必須 : はい

### ■ XML 要素 : <postdbschema>

<postdbschema> 要素はオプションですが、指定する場合は、<webcatalog> 要素の後に置く必要があります。

親要素 : <application>

#### 属性

##### *name*

切断されたマシン（ラップトップ）上の SQL Anywhere データベースに、アプリケーションのすべてのデータがロードされた後に Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager で実行される、SQL スクリプト・ファイルの名前。このスクリプト・ファイルは、統計の更新用またはデータベースの再編成用に設定できます。

タイプ : 文字列

必須 : はい



■ **XML 要素** : <remotecfg>

XML ファイル全体を囲むこの要素は、切断されたアプリケーションの構成ファイルであることを識別します。

**親要素** : なし

**属性** : なし

■ **XML 要素** : <repository>

<repository> 要素は必須で、<webcatalog> 要素よりも前に置く必要があります。

**親要素** : <application>

**属性****name**

切断されたアプリケーション・リポジトリの名前。切断されたマシン上の Oracle BI Server では、このリポジトリを Oracle Business Intelligence メタデータのソースとして使用します。

タイプ : 文字列

必須 : はい

■ **XML 要素** : <sourcingreport>

**親要素** : <table>

**属性****name**

切断されたマシン上の特定のテーブルにデータを生成する、Oracle Business Intelligence レポートの名前。

タイプ : 文字列

必須 : いいえ (外部で生成されたデータ・ファイルには必要ない)

**file**

ソース・レポートから生成された出力ファイルの名前、または外部で生成されたファイルの名前 (たとえば、シンジケートされたデータ)。このファイルは切断されたマシンに送信され、テーブルのロードに使用されます。この属性を指定する必要はありません。デフォルトの出力ファイル名は、name 属性に CSV 接尾辞を付加したものになります。

タイプ : 文字列

必須 : はい (name 属性が指定されていない場合にのみ)

### ■ XML 要素 : <table>

親要素 : <dataset>

#### 属性

##### *name*

切断されたマシン上の SQL Anywhere データベースに格納されているテーブルの名前。

タイプ : 文字列

必須 : はい

### ■ XML 要素 : <tablesql>

親要素 : <table>

#### 属性

##### *name*

切断されたマシン上の関連テーブルを作成または更新するために Oracle BI Disconnected Analytics Application Manager で使用される、スクリプト・ファイルの名前。完全データセットの場合、スクリプト・ファイルでは通常、DROP TABLE 文の後に CREATE TABLE 文が続きます。増分データセットの場合、テーブルは切断されたマシン上にすでに存在するため、スクリプト・ファイルでは通常、DELETE 文の後に（オプションで）INSERT 文が続きます。

タイプ : 文字列

必須 : はい

### ■ XML 要素 : <webcatalog>

<webcatalog> 要素は必須で、<repository> 要素の後に置く必要があります。

親要素 : <application>

#### 属性

##### *name*

切断されたアプリケーションの Oracle BI Presentation Catalog のローカル名。ローカルの Oracle BI Presentation Services では、このローカル・カタログを使用してダッシュボードおよびレポートを格納します。

タイプ : 文字列

必須 : はい

# 索引

## I

iBot 55  
instanceconfig.xml ファイル 18

## M

Microsoft Windows での認証 19

## O

ODBC DSN 19  
ODBC DSN の構成 19  
ODBC DSN 用認証 19  
Oracle BI Disconnected Analytics  
Application Manager ユーティリティ、概要 14  
アーキテクチャ、概要 14  
アプリケーション、デプロイの準備 44  
インストール 18  
概要 10  
サイレントな起動 47  
シングル・サインオン 20  
ソース・クエリー、定義 30  
ディレクトリ構造 22  
データセット定義、概要 33  
用語 11  
Oracle BI Disconnected Analytics の用語 11  
Oracle BI Disconnected Analytics の用語の定義 11

## S

SQL Anywhere データベース 13, 24  
SQL Anywhere データベースの索引 24  
SQL Anywhere データベースのテーブル 24  
SQL Anywhere データベースのテーブルと索引のテスト 24  
SQL スクリプト  
作成 24  
切断されたアプリケーション用 13  
切断されたオフライン・ディレクトリへの格納 26  
テーブルと索引 24  
テスト 26  
例 24  
Sun ONE Web サーバー 20  
Sun ONE Web サーバーの構成 20  
syncconfig.xml ファイル 50

## あ

アーキテクチャ 14  
アプリケーション構成ファイル  
Syncmode 属性 54  
作成 32  
要素 59  
例 39  
アプリケーション構成ファイルの要素 59  
アプリケーションの削除 42  
アプリケーションのテスト 45  
アプリケーションのデプロイ 44  
アラートの無効化 52  
アラート、無効化 52  
インストール  
Oracle BI Disconnected Analytics 18  
テスト 44  
ユーザーのマシン 46

## か

カタログ  
アラートの無効化 52  
作成 29  
結果セット 54

## さ

サーバー構成ファイル 18  
サーバーの構成ファイル 18  
サイレントな起動 47  
サイレント・モード  
インストール 44  
起動 47  
同期 52  
システム・トレイ 47  
システム・トレイのアイコン 47  
シングル・サインオン 20  
シングル・サインオンでのログイン 20  
事前処理済のソース・クエリー 55  
事前処理済の同期 53  
接続プール 26  
切断されたアプリケーション  
SQL スクリプト 13  
構成ファイル、作成 32  
構成ファイル、例 39  
削除 42  
シングル・サインオンでのログイン 20  
ソース・クエリー 13

ダウンロード 45, 47  
 テスト 45  
 デプロイ 44  
 同期化 50  
 同期化 (サイレント・モード) 52  
 ネットワーク環境との比較 13  
**切断されたアプリケーションとネットワーク・アプリケーションの環境** 13  
**切断されたアプリケーション用のスクリプト** 13  
**切断されたカタログ、作成** 29  
**切断されたクライアント**  
   Sun ONE Web サーバーの構成 20  
   切断されたクライアントの ODBC DSN の構成 19  
**切断されたディレクトリ構造** 22  
**切断されたマシン**  
   サイレントな起動 47  
   設定 46  
   ダウンロード 47  
**切断されたリポジトリ**  
   格納 26, 28  
   概要 13  
   作成 26  
   テスト 28  
**ソース・クエリー**  
   概要 13  
   結果セット 54  
   事前処理済の同期 53, 55  
   定義 13, 30  
   標準的なクエリー、相違 13  
**増分データセット** 56  
**増分同期** 56  
  
**た**  
**ダウンロード**  
   アプリケーション 45  
   データ増分 56

  データの同期化 50  
   ユーザーのマシン 47  
**ディレクトリ構造** 22  
**データ・キャッシュ** 54  
**データセット**  
   結合テーブル 37  
   定義 33  
   ファイルの格納 54  
**データのキャッシュ** 54  
**データベース・タイプ** 26  
**トレイ、システム** 47  
**同期**  
   アラートの無効化 52  
   概要 50  
   構成ファイル 50  
   サイレント・モード 52  
   事前処理済 53  
   設定 50  
   増分 56  
   バックグラウンド 52  
**同期の構成ファイル** 50  
  
**は**  
**バックグラウンド同期の構文** 52  
**複数のデータセットの定義** 33  
  
**ら**  
**リクエスト・キーのキャッシュ** 54  
**リポジトリ**  
   格納 26, 28  
   概要 13  
   作成 26  
   テスト 28  
**レスポンス・ファイル** 44  
**ローカル・カタログ、作成** 29